

さういふと新吉は、こいつはいけないと思つたものか、直ぐにむくむくと起き上がつて、きよとりとした顔付でいつた。

「ああ、叔父さんはあすこの家の人だつたね。」

「何でえ。子供の癖に太え野郎だな。」

大川が少し呆れながらさういふと、新吉は狡るさうな目付でぢろりと相手の顔を見上げながら、

「叔父さん。御免よ。ちよつと悪戯いたづらをして見たんだ。」

「悪戯にしちやあ少し手が混み過ぎてゐるぜ。一體お前はいつもこんな太え真似をするのか。」

「ううん、さうぢやないよ。實は姉ねえやが病院に入つてしまつて、小遣の呉れ手がなくなつたから、それでお金が欲しかつたんだ。」

「姉や……。お前の姉やは何ていふ名前なんだ。」

「姉やの名か……。姉やの名はお鳥つていふんだ。」

「なに……。お鳥……」

彼は思はず目を睜つた。

## 三

「さうか……。お前はお鳥さんの弟だつたのか。」

さういつてから大川は、急に優しく新吉の着物に附いた泥などを拂ひ落してやりながら、

「如何だい。お前に何か御馳走をしてやらうか。」

「ほんとかい。叔父さん。」

新吉はまた狡るさうな眼差で、ぢろりと大川の顔を見上げた。

「ほんとだとも……。何でもお前の好きなものを御馳走してやるよ。」



さういふと新吉は、ちよつと悪<sup>わる</sup>狡<sup>たう</sup>い薄<sup>うす</sup>笑<sup>わら</sup>ひをしながら、暫く考へた後でいつた。

「さうだなあ。おいらは一番洋食がいいや。」

「うん、洋食か。よし來た。それぢやあ洋食を御馳走してやらう。」

二人はそれから一緒に、活動寫眞館の裏通りの方に歩いて往つて、カフェスターといふ一軒の安西洋料理屋を見付けると、そこに入つた。そこは今丁度人が出<sup>で</sup>盛<sup>ま</sup>る時分なのに、彼等の外にたつた一組客があるだけで、何處となく淋しく暗い空氣が漂つてゐた。卓<sup>テーブル</sup>の下に犬の寢そべつてゐるのも懶<sup>もつ</sup>かつた。

大川はお白粉をべつとり塗つた女給が、獻立を持つて注文を聴きに來ると、椅子に腰を懸けて脚<sup>あし</sup>をふらふらさせてゐる新吉の方を向いて、

「おい、何が食べたい。何でもお前の好きなものを云へよ。」

と云つた。と、新吉はちよつと首を傾<sup>か</sup>けて考へてから、

「さうだなあ。おいら、やつぱりカツがいいや。」

と舌<sup>したな</sup>舐<sup>な</sup>めずりをしながら答へた。

女給が注文を聴いて往つてしまふと、大川は待ち兼ねたやうに新吉に訊いた。

「おい、さつきお前は姉さんが病院に入つてゐるといつたがあれは一體ほんとなのかい。」

「うん。ほんとだよ。」さう云つてからこましやくれた調子で、

「それでおいらあ困つてゐるんだ。」

「さうか。ほんとか。何か病氣でもしたのかね。」

と、新吉は強く首を振りながら、

「ううん、病氣ぢやねえんだ。怪我をしたんだ。」

「ええ……。怪我……」

大川は思はず顔色を變へた。彼の頭には直ぐに鐵の爪の何とかいふ男のことが浮んで來た……。

「それぢやあ誰かに殴られてもしたのか。」



「ううん、さうぢやあねえんだ。自動車に轢かれたんだ。」

「さうか。自動車に轢かれたのか。一體それは何時のことなんだい。」

「さうだなあ。もう半月位前になるかなあ。」

と云つて例の悪狡い眼差をしながら、「お前知つてゐるだらう、姉やが警察に捕まつたことを……」

「……」大川は何と返事をしていゝか分らないで、黙つて唯この罪の巢に生れて育つた哀れな不具の子の顔をまじまじと見詰めてゐた。

「知つてゐるよ、おいらあ……。おいらが届けた千圓を姉やが盗んで遁けたんぢやねえか。それであんまりばつばと金使いが荒いつて云ふんで、姉やは警察へ拘引られたんだ。」

「うん、それで怪我をしたのは何時のことなんだ。」

「警察から放免されると間もなくのことよ。何處へ往く氣だか知らねえが、姉やは鮎屋横丁を廣小路の方へ出たところで轢られたんだ。」

「さうか。おれはちつとも知らなかつたよ。餘つ程ひどい怪我をしたのか。」

「ううん、そんなにひどかないけれど、しかしまだ半月位は病院に入つてゐなくつちやあいけねんださうだ。」

「さうか。病院は何處だ。」

「小島町の樂々堂つて病院さ。」

「うん、あそこか。」

さうすると新吉はまた狡るさうな薄笑ひをしながら、

「叔父さん。をかしいな。何故叔父さんはそんなに姉やのことを聴きたがるんだい。」

これには大川も何と返事をしていゝかちよつと困つて、唯黙つて苦笑をするより外仕方がなかつた。しかしその苦笑の蔭には、やつとのことで女の居所を探し當てたと云ふ、喜びの情をも潜んでゐた。

「をかしいな。叔父さん。返事が出来ねえのかい。」



そこへ女給が注文の料理を運んで来たので、大川はその皿を新吉の前へ押し遣りながら云つた。

「さあ、お食がり……。そして後は何にしよう。」

「何だ。叔父さん頭返事を胡魔化しちまつたぜ。」それからちよつと考へるやうな顔付をして「おいらあ後はライスカレーだ。」

さういつたかと思ふと新吉は、奪ふやうにナイフとフォークを取り上げて、今持つて来た料理の皿を抱き込むやうにして、食るやうにがつがつしながら食ひ始めた。

## 四

大川が新吉を急ぎ立てるやうにして、この安西洋料理屋を出たのは、それから三十分ばかり経つてからだつた。もう日はとつぷりと暮れてしまつてゐたが、雨もよひの夜空に公園の灯明りが赤く映つて、ぞろぞろ通る人の蹠音などが絶間なく聴えるのが、何となく淺

草の夜らしい気持がして、二人は快く人波に捲き込まれて往つた。足はひとりでに廣小路の方へ向つて歩いてゐた。

「叔父さん。ほんとにこれから病院へ見舞に往くのかい。」

新吉はさつきカフェを出懸けに大川の云つた言葉を慥めるやうにかういつて訊いた。

「うん、往くよ。お前も一緒に往つて呉れるだらう。」

「あゝ、往つてもいいが……。叔父さん。その代りおいらに小遣を呉れよ。」

「うん、やるが。いくら欲しいんだ。」

「さうだなあ。二圓ばかりお呉んな。」

「よし来た。今やるからお待ち……。」

大川は新吉のいふがまゝに、もう残り少になつてゐる金を二圓遣つてから、財布の中を覗き込みながら、

「おや、おや……。これで見舞の水菓子でも買やあ空つけつた。」



「叔父さん。氣の毒だなあ。」

新吉はまた小ましやくれた口を利きながら、顔には薄笑ひを浮べながら大川の顔を見上げた。

「なあに……好いよ。それぢやあ小島町まで電車に乗らう。」

「だつて叔父さん。歩いたつて直きだぜ。電車に乗るほどのこたあありやしねえぜ。」

「しかし何だらうな。お前の脚は緩いからな。」

さういふと新吉はちよつと悪戯つ子らしく肩を竦めて、

「叔父さん。お前はそんなに早く姉やに會ひてえのか。」

「馬鹿……。何をいやがるんでえ。」

大川はかう吐り付けるやうに云つたが、體中一時にかつかと熱くなるやうな氣がして、ひとりでに足が早くなつた。

「叔父さん。もうちつと悠くり歩いてお呉れよ。」

新吉は、ちよこちよこ小走りに走りながら後を追つた。

大川は小島町の停留場の近くまで來ると、そこに一軒の水菓子屋を見付けて、林檎を十個ばかり籠に詰めて貰つた。艶々とした林檎の色を見てみると、彼の胸は何故か微かなときめきを感じた。そして林檎の籠を提げて外へ出ると店の前に突つ立つて彼の出て來るのを待つてゐた新吉に向つて訊いた。

「おい、姉やは林檎は嫌ひぢやあないだらうな。」

「うん、好きだよ。」さういつてすぐ籠の中を覗き込みながら「好い林檎だなあ。おいらも後で姉やから貰はう。」

かうして二人は樂々堂病院の前まで來たが、いざ門を入るとなると、大川は何時になく何となく耻かしいやうな氣がして、逡巡ふやうに立ち留まつた。が、新吉は關はずどんと入つて往くので、それに引き摺られるやうに立關を上がつて、廊下傳ひに階子段を上がつて、二階の病室の方へ通つて往つた。と、新吉は一番奥の病室の扉の前まで來ると、立



ち留まつて大川の方を振り返りながらいつた。

「こゝだよ、姉やの入つてゐる部屋は……」

「うん、さうか。それぢやお前先きに入れよ。」

さういひながらも大川は、何だかこゝに訪ねて來たのを悔いたいやうな、妙な重苦しい心持がして來た……。手に提<sup>さ</sup>げてゐる林檎の籠までが急に重くなつたやうに感じた。

「いゝよ。おいらと一緒に入らう。」

新吉がさういふなり扉<sup>びら</sup>を開けて中に入つたので、大川もやつぱり引き摺られて往くやうに、ふらりと部屋の中に入つたが、そこには白い布で蔽はれた寢臺<sup>べつだい</sup>の上に、お鳥が蒼ざめた顔をして寝てゐる外に、枕頭<sup>まくらもと</sup>のところの椅子に腰を懸けて、今まで讀んで聽かしてゐたらしい講談本を開いたまゝ、不圖彼の方を見上げてゐる、一人の若い美しく着飾つた、貴婦人めいた女がゐるのを見た。見るとその女は、彼の妹の優梨子だつた。

## 黄金魔

### 一

「あつ、兄さん……。」

優梨子は大川の顔を見ると、びつくりして手に持つた講談本を取り落して、思はず椅子から立ち上がりさうにしたが、しかし直ぐに氣が付いて落ち着いた調子で、

「まあ、如何なすつたの、兄さん。」

と不思議さうに訊いた。

が、ほんとうに驚いたのは優梨子よりも大川の方だつた。彼はその部屋に入つてくるなり、不圖そこにある女が妹の優梨子だと云ふことを認めると、まるで急に化石した人のや



うに、ぢつと瞳を凝らしたまま、身動きもしないでそこに立ち竦んでしまった。一時顔はかつと燃えるやうに赤くなつたが、直ぐに今度は青ざめたやうに白くなつた。暫く黙つてゐたが、やがて彼は唇を顫はせながら、吃るやうな調子で云つた。

「うん……ちよつとその見舞に來たんだ……。」

「えつ、この方の見舞に……。」

「うん、さうだ。お鳥さんの見舞に來たんだ。自動車に轢かれて怪我をしたつて話を、今この子から聞いたもんだからな。」

と、優梨子は始めて新吉に氣が付いたやうな様子で、

「おや、この子はこの間あたしが手紙を頼んだあの子ですね。」

「なあんだ。お前まだ知らないのか。この子はお鳥さんの弟ださうだよ。」

「まあ、さうなの。あたしいろいろ用があつて病院にあんまり來られなかつたので會はれなかつたけれど……。まあ、さう……。お前さんはお鳥さんの弟だつたの。」

優梨子はさう云つてから寢臺の方を振り向いて、

「お鳥さん。あたしあなたの弟つて人、知つてゐるんですよ。」

お鳥はまだ體がひどく衰弱してゐるやうな様子で、さつきからぢつと潤んだやうな目でぢつと大川の顔を凝視めてゐたが、かう話し懸けられては、唯微かに黙頭いたばかりだつた。半月ばかり見ないうちにすっかり瘖せて、峻しいやうな顔付にはなつてゐたが、しかしかうして寢てゐる間に、荒んだ心持はだんだん消えて往つたものと見えて、何處かに女らしいしほらしさと、汚されてゐない美しさとが蘇つて來てゐた。無造作に束ねた髪と、衰への見える頬の色と、大川の目には痛々しいといふよりは、むしろはでやかに艶めかしく映つた……。

大川はかなり長い間お鳥の顔を凝視めたまま黙つてゐたが、そのうち不圖氣が付いたやうに、手に提けてゐた林檎の籠を枕頭の臺の上に置いて、

「お鳥さん。お見舞の印だ。どうぞ食べて下さい。」



と極めてぶつきらほうな調子でいつてから、始めてそこにあつた椅子に腰を下ろした。そして改めて優梨子の方を向いて訊いた。

「そこでお鳥さんを轢いたのは、一體誰の自動車だつたんだね。」

「ええ、それは……。」

さう訊かれると優梨子は困つたやうな顔付で、さういひ懸けたまま黙つてゐた。と、大川は大抵それと察したらしい様子で、多少の憤いきどほりをその言葉の中に籠こめながら、

「うん、自分の口からはいひ難にくいだらうからいつてやらう。それはお前の乗つてゐた自動車なんだらう。」

が、優梨子はさういひはれても、やつぱり聲を封じられたものゝやうに、ちつと俯うつむ向いたまゝ黙つてゐた……。

「黙つてゐたつて、おれはこの部屋に入つて来て、お前の顔を見た時から、大抵察しは附いてゐたんだ。」

といつてから詰るやうに

「一體お前は今何をしてゐるんだ。」

と今度はやや兄らしい情のある調子で訊いた。

と、優梨子はやつと顔を上げて、

「あたしあれから或る人のところに片附いたのです。」

といつたが、何處かおどおどとして落ち着きのない様子が、その顔の色にも現はれてゐた。

「何、片附いた……。誰のところへ嫁に往つたんだ。」

「それは兄さんの知らない人です。」

「それではお前は正式に結婚したつて譯ではないんだらう。」

「いいえ、正式に結婚しました。」

「さうか。それぢやあ名前位いつたら好いちやないか。」



「ええ、いひます。それは……。」

と優梨子が名前をいひ懸けやうとした時だつた荒々しく入口の扉を開けて、もう五十五六かと思はれる位の、見るからに我慾の塊りのやうな、赭ら顔の肥満つた男が、はち切ねさうな背廣の服に、臘虎の襟の附いた外套を着て、遠慮なくづかづかと部屋の中に入つて来た。

「今日はどんな工合ぢや。大分容體は好くなつたかの。」

この男はそこにゐる優梨子や大川には目も呉れずに、寢臺の傍に近寄つて往つて、心持目を細めながらにたりと笑つて、お鳥の顔を覗き込んだ。

## 二

お鳥はしかし黙つてゐた。そしてその男の顔を見まいとするやうに目を閉つた。

「ふうん、今日もまだ好くないやうぢやな。」

その男は別にお鳥が返事をしないでも、機嫌を悪くするやうな様子もなく、さう眩きながら始めて部屋の中を、一顧ぐるりと見廻はしたが、見すほらしい身装をした大川の姿を見ると怪訝さうに優梨子に向つて、

「おい、優梨。そこに居られる方はどなたぢや。」

とわざと鄭寧な調子で訊いた

「ええ、それはあのう……。實はわたくしの兄でございますの。」

優梨子がさう答へると、その男はいよいよ怪訝の眉を深く寄せて

「何、兄だ……。しかしお前は同胞も何もないといつてゐたぢやないか。」

「ええ、それはわたくしは子供の時から他所の家へ貰はれて往つてゐましたので、その家には同胞がないといふ意味でしたの。」

「さうか。つまり苗字の違つた兄さんだな。」

といったがまだすつかり疑ひは解けないやうな顔付で薄笑ひをしながら、



「それぢやひとつ御挨拶をしやう。」

その男はさういつてから、便々たる腹を大川の方に向けて、襦着の釦に搦ませてある太い時計の金鎖を、金剛石を鑲めた太い金の指環を嵌めた指の先で弄びながら、

「ええ、わたしは東海林鐵平といつて、今度優梨子を妻にした者です、どうぞ今後ともお心易く。」

東海林鐵平といふ名前を聴くと、直ぐにこれが月島に鐵工場を持つてゐる所謂戦争成金の一人だといふことが分つた。彼の好色と貪婪の噂は、時々世間へも新聞を通して傳へられてゐた。

「はあ、左様ですか。私は大川眞吉といつて、優梨子の兄にあたる者です。」

大川は電燈の光を受けて、きらきら光つてゐる金剛石や金の鎖に、すつかり反感を持たせられて、多少挑戦的な態度でかう答へた。そしてそれから直ぐに優梨子の方を向いて蔑むやうな、憫れむやうな、悲しげな顔付になつて、

「おい、お前が今正式に結婚をしたといつたのはこの方なのか。」  
といつて訊た。

「ええ、そうです。この人です。」

さういふ優梨子の目に、ちよつと悲しみの影が宿つたけれども、それは大川の目には入らなかつた。

「さうか。それぢやあさぞ幸福な家庭を作つてゐるのだらう。改めてこの兄からお祝ひをいふよ。」

「ええ、難有う。」

優梨子はさういつてから、恨むやうな調子で、

「しかしあたしは兄さんから、お祝ひの言葉を云つて貰はなくつても好いと思ひますわ。」

「如何してだ。何故おれがお前に祝ひの言葉をいつてはいけないのだ。現在血を分けた一人の兄がいふ祝ひの言葉を、何故お前は受けないのだ。」



「だから一應は難有うといつて受けてゐるぢやありませんか。しかし兄さんは心から祝ひの言葉をいつていらつしやるんぢやない、といふことが分つてゐるんですもの。」

さういられると大川は、事實優梨子のいふ通りなのだから、ぐつと返事に詰つてしまつた。

「さうでせう。それならあたしは何ともいつて貰はない方が、どの位心持が好いか知れないのです。それに兄さんとあたしとは兄妹とはいふものの、家と家との關係からいへば、敵同志として育つて來たのぢやありませんか。兄さんはやつぱりあたしを敵の娘と思つていらつしやるのでせう。」

「いや、おれはさうは思つてゐやしないよ。」

「いいえ、さう思つていらつしやるに違ひありません。この間のお金だつてさう思つていらつしやればこそ受けて下さらなかつたのです。」

さういつてから優梨子は、ぢつと口惜しさうに大川の顔を凝視めながら、

「しかしあたしはもうあの家は出てしまひました。そしてこの東海林の家に片附いた以上は、もう兄さんも敵の娘と思つて下さらなくつても好いでせう。」

しかし大川は返事もしすに、ぢつと壁の方を凝視めたまま、身動きもしないで何か考へてゐるが、泣いてゐるといふことはその肩が微かに顫へるので直ぐに分つた。

と、突然この張りつめたやうな空気を掻き亂すやうに、東海林の濁みた笑ひ聲が聴こえた。

「ははははは……何ぢや、兄妹同志で敵だの何だのと……。おい、優梨。お前もつまらんいひ合ひは止めにしたら好いぢやないか。さあ、大川君。それよりもひとつお近付の印に、これから何處かへ飲みに往かうぢやないか。」

が、大川はこれにも返事をしないで、やつぱり壁の方を向いたまま黙つてゐた。

「如何したんぢや。大川君。さあ、往かう。」

さういつて東海林が軽く背後から肩を敲くと、大川は急に椅子から立ち上がつて、涙ぐ



んだやうな顔へ聲で、

「いや、僕は失敬します。」

といつたかと思ふと、そのまますうつと入口の扉ドアを開けて、遁にげけるやうにして出て往つてしまつた。

「おぢさん……おぢさん……おいらも往くよ……おいらも往くよ。」

今まで寢臺の蔭に隠れるやうにしてゐた新吉は、何時の間に籠の中から盗み出したものが、林檎を一個手に持つたまま、轉ころけるやうにして大川の後を追つた……。

## 三

大川は病院の門を出ると、急に冷つめたい夜氣が感じられるとともに、悲しみが胸の底から込み上げて來た。

「賣つたんだ……賣つたんだ……妹は體を賣つて、あいつの持つてゐる黄金と結婚をした

んだ……。何だ……。あの太い金鎖は……。何だ……。あの金剛石ダイヤモンドの入つた指環は……。」

そんなことを心の中で呟つぶやいてゐるうちに、妹があんな男と結婚したといふことが、ひどく情なさけなく思はれて來て、涙が頬を傳つてほたほたと零こぼれた……。

「賣つた妹も賣つた妹だが、買つた男も買つた男だ。父子おやこといつても好い位年の違ふ女房を持つて、よく恥しくもなく出歩けたものだ……。さうだ妹は敵の家を出たといつたな……。しかし……。敵の家を出て何處へ往つた……。それは敵の家よりもつと悪いところぢやないか……。東海林鐵平……。何だ……。あいつは。黄金えんぎの權化ごんけのやうなやつだ……。黄金魔だ……。」

かう心の中で言つてゐると、だんだん悲しみも忘れられて來たが、それでもまだ大きな聲を上げて、空に向つて叫びたいやうな妙に重苦しい興奮を感じてゐた。

「それにしてもお鳥は……。お鳥はあそこに置いてても大丈夫だらうか今はああしてまだ怪我が癒いえないから大丈夫だが、もしあの體が元通りになつたら如何だらう……。」



さう思ふと大川の目には、さつき東海林が病室の中に入つて来るなりそこにゐる者には目も呉れずに、直ぐにお鳥の寢臺の傍に近寄つて往つた様子が、現在そこにゐれば殴り付けてやりたいほど腹立たしく映つて来た……

「あの見るから女好きらしい緒ら顔……。あのはち切れるほど肥満つた體……。あの妙に優しい猫撫で聲……。何だ……。あいつは……。あの目を細めた顔付は……。ほんとに唾でも吐き懸けてやりたいやうなやつだ……。」

さう心の中で思ひながら、突然相手の男がそこにゐるやうな腹立たしい心持で、かつと音を立てて地面を目懸けて唾を吐いた。と、ぐつと誰だか袂を引つ張つて、

「おぢさん危いよ。そこは河つ縁かづちだよ。」

といふものがあつた。見ると、それはさつき彼の後を追ふやうにして病院から附いて来た、例の尙儂の子の新吉だつた。

「ああ、お前はまだるたのか。」

大川は始めて我に返つたやうに、ほつと溜息ためいきを吐きながら四邊を見廻はして、

「おや、ここは駒形の河岸だな。如何してこんなところに來たのだらう。」  
と呟くやうにいつた。

「だつておぢさんはおいらがいくら話し懸けても返事もしねえんだもの……。さつきなんか危なくおぢさん電車で轢かれるところだつたぜ。」

さういはれる大川は自分自身を嘲けるやうな苦笑をしながら、

「はははは……。馬鹿だよ、おぢさんは……。くだらないことを考へながら歩いてゐたんで、まるでここへ來るまで夢中だつたんだ。」

「くだらないことつて何を考へてゐたんだい。」

「うん、ほんとにくだらないことよ。馬鹿々々しいやうなことだ。」

と、新吉はまた大人のやうにませた調子で、

「おいら當てて見やうか、おぢさんの考へてゐたことを……。」



「うん……。」

「おぢさんは姉やのことを考へてゐたんだらう。」

さういはれると大川は、相手が子供だと判つてゐながらも嬉しくなつて、

「馬鹿なこといふない。そんなこつちやないよ。」

といつたが、向ふ河岸がしの家の灯明りや、河の中を走つてゐる船の舷燈などを眺めてゐると、胸の底から湧き上がつて來る寂しさを如何することも出來なかつた。

「さあ、往かう。」

大川は新古がお鳥の弟だと思ふと、この尙儂の子にも何となく親しみが感ぜられて、優しく手を引つ張つてやりながら歩き出した。

## 四

大川は新吉を伴れて、その晩かなり夜が更けてから「鳩の家」に歸つて來た。

近頃すっかり貧民研究に没頭してゐる能島は、まだ例のトルストイの寫眞の下の机に向つて、何か統計のやうなものを調べてゐたが、大川が歸つて來たのを見ると、待ち構えてゐたやうに、

「如何したんだ。大變遅かつたぢやないか。」

といつて訊いた。

「ええ……。先生やつとお鳥の行方が分りましたよ。」

大川はさういつてから、背後に隠れるやうにしてゐる新吉の頭を撫でながら、

「先生。分らないもんぢやありませんか。この子……見覚えがあるでせう……。何時だかあの優梨子に頼まれて千圓束を持つて來た子ですよ。この子はあのお鳥の弟なんださうです。」

能島は新吉の顔を見ると、ちよつと不愉快さうな顔付をしてから、

「ふうん、さうかい。それでその弟の口からあの女の行方が分つたつて譯なんだね。」



「ええ、さうです。公園の池の傍で會つて話してゐるうちに、この子がお鳥の弟だといふことが分つたのです。そしてあの女が自動車に轢かれて怪我をしたので、入院をしてゐるといふことが分つたのです。」

「自動車に轢かれて……。」

さういつてびつくりしたやうに目を睜つてゐる能島に向つて、大川はひどく落ち着いた調子で訊いた。

「先生。その自動車は一體誰の自動車だと思ひです。」

「さうだなあ。僕の知つてゐる人かい。」

「ええ、知つてゐる人です。」

「さあ、誰だらうなあ。自動車に乗る人といふと、あんまり知つてゐる人がないが……。」  
能島は首を傾けて暫く考へてゐたが、やつぱり大川の背後に隠れるやうにして、林檎を玩弄あそびにしてゐる尙儂の子を見ると、不圖氣が付いたやうにいつた。

「うん、ひよつとしたらあの優梨子さんぢやないか。」

「ええ、さうです。あいつのです。あいつの汚れた車の轍わだちに懸けられたのです。」

大川はさういつてから、悲しさうな顔付で、

「先生。あいつはもういよいよ駄目ですよ。私は今夜病院でちよつと會ひましたが、あいつは大事な體を金のために賣つてしまひました。」

「金のために體を賣つた……。」

能島はちよつと如何いふことだか分らないやうな様子で訊き返した。

「ええ、あなたも御存知でせう。東海林鐵平と云ふ我利一點張の強慾爺がゐるといふことを……。戦争で金を儲けて、よく女のことと新聞に噂を書かれる奴です。妹はあいつのところへ嫁に往きました。」

「ええ、あんな奴のところ……。」

この間惜し氣もなく千圓の紙幣束を届けて寄越したのには、何か譯があるだらうと思つ



てゐた能島も、優梨子が人もあらうに三十幾つも年の違ふ老人——しかもそれが好色と貪婪とで世に聽こえた老富豪のところへ、嫁に往つたといふことを聽いては、さすがに驚かすにはゐられなかつた。

「さうか。そいつは少し意外だつたな。」

「いや、しかし自分の妹ですが、あの優梨子つてやつはそんな女ですよ。」

大川はちよつと傷ましうな顔付をしたが、直ぐに氣が付いたやうに能島に向つて、

「先生。今夜は幾人位話を聽きに來ました。」

「うん 今夜か……。」

能島はさういつてから、瘦せた頬の上に苦笑を浮べながら、

「たつた一人しか來なかつたよ。」

「たつた一人……。おや、おや、だんだん心細くなつて往きますね。」

「しかしたつた一人だつたけれども、僕に取つては大に面白い一人だつた。」

「誰です。どんな人間だつたのです。男ですか、女ですか。」

「男さ。しかも名前ならば君も慥かに知つてゐる筈の男だよ。」

「知つてゐる筈の……。」

さういつて不思議さうに首を傾けてゐる大川の顔を、ぢつと椅子に腰懸けたまま見上げながら、

「何だよ。あの鐵の爪の定吉つて男がやつて來たのだよ。」

「えつ……鐵の爪の定吉……。先生。ほんとですか。」

「ほんとだとも……。誰が嘘なんぞ吐くものか。兎に角今夜來たのは、あいつが暴れ込んて來ただけだつたのだ。」

その言葉を聽くと大川は、能島の傍へ詰め寄るやうにしていつた。

「それで先生如何しました。」

「うん、僕か……。さういつてから能島はにこやかに微笑しながら、「僕はあいつのするが



ままに、打つたり蹴られたりされてゐたのだよ。見たまへ。手にも足にもこんなに怪我をしてしまった。」

見ると手にも足にも、摺りむいた傷や、紫色になつた打たれた痕などが澤山あつた。

鐵の爪といふ名前を聴くと、新吉はびつくりして脅えたやうに、大川の體にかぢり付いたまま、きよきよ四邊を見廻はしてゐた。

## 大雪の夜

### 一

お鳥が病院から鎌倉にある東海林の別荘に移されたのは、それからまた半月ばかり経つてからであつた。

自動車に轢かれた時にお鳥の受けた傷は、さまで重くはなかつたけれども、これまで長い間殆んど自暴自棄に近い、荒んだ生活を續けてゐた結果が、こんな時に體の上にも現はれて来て、病院に入つてからは急にめつきりと痛々しいまでに衰へてしまつた。傷は半月ばかりの間に、すっかり元通り癒えてしまつたが、毎日熱が下がつたかと思ふと急に高く昇つたりするやうな容態が續いて、何時までも體温が平靜に復さなかつたから、醫者も終



ひには、或は肺を冒されてゐるのではないかと云ふやうな疑ひを持つやうになつた。それで兎に角轉地させたら好いだらうと云ふので、優梨子は夫の東海林に勧めて、丁度鎌倉の別荘が空いてゐるのを幸ひ、看護婦を一人附添はして、そこにお鳥を移したのだつた……。

病院で正月を迎へて、春早々鎌倉の別荘に移されたお鳥は、以前の自分の生活を思ふと何だか夢のやうな氣がしてならなかつた。あの高い塔の下の暗いみぢめな窟いしやの中のやうな生活——體ひとつを資本もととしてその日その日を喘あはぎ喘あはぎ暮らしてゐる哀れな女達や、獸けもののやうに色を慕ひ香を慕つて寄つて來る男達のことを考へると、今ではまるで自分の住んでゐる世界とはすつかり懸け離れた、遠い遠い國のこのやうに思はれて、さして悲しくも思はれなかつた。狂ほしい酔心地も今では大抵忘れられて、時々夢のやうに思ひ出されるのは、子供の時分母の太陽齋天女の一座と一緒に、巡業して歩いた時に見た所々方々の景色だつた。そこには深い碧色をした海もあれば、緑濃い野や雪を戴いた山もあつて、これまで絶えて知らなかつたやうな懐しさが感じられた。

「さうだ。これを機會に生れ變らう。これまでの汚れた生活から脱ぬけ出して、新しい清い正しい生活に入らう。」

さう思ひ付いたのは鎌倉の別荘に移されてからだつたが、さう思ふと何故だか何時か病院に來て呉れた、あの太川と云ふ男のことが懐かしく思ひ出された。あの職工上りらしい逞ましい體付、あの正義を求めてゐるやうな力強い目、あの汚れたものを憎むやうに引き緊しめられた口元——さう云つた男の姿や顔形を考へてゆくと、何だかこれまで知らなかつたやうな温かいものが、衰へた胸にも感じられて、ひとりではつと深い溜息も出るのだつた。

「しかし如何してあの人はたつた一度限で、あれつきり見舞に來て呉れなかつたのだらう。」

さう思ふとあの時兄妹で云ひ合つてゐたことや何かと、そこには何か深い事情があるらしく想像されたが、しかし優梨子に向つて改めてそんなことを訊くのは憚はられた。が、病



院にゐるうちも、鎌倉に移つてからも、優梨子が見舞に來て呉れる度毎に

「あなたの兄さんは如何なすつたんでせう。」

と訊くことだけは忘れなかつた。しかしさう訊かれると、優梨子はきつと寂しさうに俯向いてしまつて、

「きつとあたしを汚らはいやつだと思つてゐて、それでやつて來ないんですよ。」

と何處か棄鉢な悲しさうな調子で云つた。お鳥はその言葉を聴くと、何だか優梨子が氣の毒になつて、もう今度は訊くまいと思ふのだが、しかし顔を合せて見ると、如何しても訊かすにはゐられなかつた。

お鳥は鎌倉に移つて來てから、めきめきと健康を取り返して行つた。……そして僅か十日も経たないうちに、もう起きて天氣の好い温かい日などには、海岸位散歩することが出来るやうになつた。東海林の別荘は材木座も光明寺に近い、遠く相模灘の見渡される山腹にあつたから、風が吹いて散歩の出來ない時などには、お鳥は椽側に籐椅子を持ち出して

それに腰を懸けたまゝほんやり海を眺めてゐた……。さう云ふ時にはお鳥の目には、きつと大川の姿が海の上に幼ながらおきなも雄々しく見えた……。

その日も丁度お鳥がさうして椽側の籐椅子に腰を懸けて、ほんやりもの思ひに耽つてゐた時、東京から優梨子が見舞に來たと云ふことを、別荘番の爺おやぢが知らせて來た。

二

「しばらく……。如何……體の工合は……。」

「ええ、難有うございます。お蔭さまでこちらへまゐりましてから、熱もあんまり出ないやうでございますわ。」

「さう……。それは好いことね。あたしどんな工合かと思つて心配してゐたのよ。」

こんな話をしながら優梨子とお鳥とは、看護婦が出て呉れた座布團の上に座つた。晴れた日だつたけれども、寒さが酷きびしく、風が強いので、椽側に立て廻めぐらした硝子障子が、



絶えずがたがた音をたてようさかつた。

「あのね、今日は主人も一緒に来るつて云つてゐたんですけど、急に用事が出来て夕方  
でなければ来られないんですつて……」

優梨子がさう云ふと、お鳥はむしろ来ない方を喜ぶやうな顔付で、

「旦那様はお忙がしいでせうから、わざわざ来て下さらなくつても好うございますの……」

「いいえ、あの人もね、あたしの自動車があなたを轢いて怪我をさせたんだから、主人にもやつぱり責任があるつて云つて、ひどく心配してゐるんですよ。ああ、それからこれはほんのお見舞と云ふだけのものですが……」

優梨子はさう云ひながら、看護婦に云つて持つて来た風呂敷包を開けさせたが、その中にはお鳥がまだ見たこともないやうな西洋菓子くわいものの箱や果物の罐詰などが、とても一人や二人では一月かかつて食べ切れぬほど澤山入つてゐた。お鳥は唯びつくりしたやうな目

を睨つて、風呂敷包の中から取り出される品々を見詰めてゐた……

「まあ、こんな……如何も難有う存じます。」

「いいえ、お禮を云はれるほどのものではありませんけれど……」

優梨子はさう云つてから氣が付いたやうに、風呂敷包と一緒に置いてあつた、通草あけびの籠に入れた西洋酒の壺を出して、

「あのね、これは主人からお見舞にですつて……。何とか云ふ大變古い上等な葡萄酒ださうですよ。葡萄酒は古いほど好いんですつてね……」

「さうでございますか。何だかあたしのやうなものが、こんな好いお酒を頂くのは勿體ない氣が致しますわ。」

お鳥は心からさう思つてゐるらしく、前に置かれた葡萄酒の壺を、しけしけと眺めながら云つた。

優梨子はそんな見舞の品々を、そこに取り出して並べてしまふと、今度は急に改つたや



うな調子になつて、

「あのね、實は今日はお見舞かたがた、ちよつと御相談したいことがあつて來たんですが……。」

お鳥は優梨子からさう改つて話し懸けられるのは始めてなので、ちよつと狼狽うづなえたやうにどぎまぎしながら、

「何でございます、その御相談とおつしやるのは……。」

「ええ、それは外でもないんですがね……主人はうすうすあなたのこれまでの境遇を知つて、大變同情して、何なら家に置いて、あたし附の小間使にでもしたら如何かつていふんですの。」

「ええ、難有うございます。」

女魔術師の私生兒として暗黒やみを背負はされて育つて來たお鳥は、他人から温かい情のある言葉を懸けられるのは、始めてといつてもいい位だったので、直ぐにもう涙なみだ含んでしま

つて、後の文句をやつとの思で續けた。

「さうして頂ければどの位幸福しあわせだか分かりませんが、しかしそれではあんまり結構過ぎます。」

「兎に角主人もさういひますし、あたしも大變好いと思つてゐるんですけど……。あなたさへ承知なら、あたしは今日にも極めやうと思つてゐるんですよ。」

「有難うございます。」お鳥はもう一度さう繰り返していつてから「わたくしに無論否やはございませんわ。」

「さう……。それではお給金などのことは後で極めるとして、兎に角家にゐて貰ふことにするわ。」

「ええ、どうぞ……。」

お鳥は今にも涙が零れさうになつて、暫くの間は顔を上げることも出来なかつた。

東海林は夕方になつても見えなかつたので、二人は差し向ひで晩飯を濟ました。その間



もお鳥は幾度か優梨子に向つて感謝の意を洩らして、

「ほんとにあたしさうして頂ければ幸福ですわ。」

と云ふ言葉を、幾度も幾度も繰り返して云つた。お鳥はまだ東海林の家が、獄のやうに暗く冷たい空気に満されてゐるといふことを知らないのだつた。

晝間からかなり強く吹いてゐた風は、夜に入ると急に一層風威を増して、海鳴の音が轟々とももの凄まじく聴こえ始めた。硝子戸越しに見ると、暗い夜の海には、浪が白泡を立てて荒れ狂つてゐた。何を叫ぶのか「おおい」と長く聲尻を引いた叫び聲が、濱邊の方から聴こえて來るのももの凄かつた。

それに夜に入ると同時に降り出した雪は、見る見るうちに積つて往つて、冬の夜の寒さはしんしんと身に染みて感じられた。

八時——九時——もう九時半になつたけれども、來る筈になつてゐる東海林は姿を見せなかつた。

「如何したんでせうねえ。夕方までにはきつと往くからつて話だつただけけれど……。」

「あんまり遅うございますわねえ。」

「ええ……。あなたもお寢みなさいよ。起きてゐて體に障るといけないから……。」

「なに、大丈夫でございますよ。」

優梨子は硝子戸越しに外を覗いて、

「あら、あら、もうあんなに積つちまつたわ。ねえ、屋根なんか眞つ白よ。」

「この雪ぢやあ、旦那様もお困りでございませうねえ。」

「そうねえ……。しかし如何したんだらう。」

茶の間で話し合つてゐた二人は、云ひ合せたやうに柱に懸けてある時計を見上げた。

「ああ、もう十時ですわ。」

と、丁度時計が十時を打ち始めるのを合圖のやうに、どンドン表の玄關の扉を敲くものがあつた。



「あら、爺ぢいはもう玄關を閉めちまつたのか知ら……。誰か敲たたいてるるやうね。」  
 「ええ、きつと旦那様ですわ。」

しかしそれは東海林ではなく、郵便脚夫いっぴんはたらが電報を配達して來たのだつた。

## 三

別莊番の爺ぢいがそこに置いて往つた電報は、東京にゐる東海林から優梨子に宛てて出したもので、それには唯簡單に「ヨウデキタスグカヘレ」と書いてあるだけで、詳しいことは分らなかつた。

「何でせう。兎に角あたし直ぐ歸るわ。」

優梨子は電報を疊んで、帶の間に入れながら立ち上がった。

「ですけど……。奥さま。もう終列車には間に合ひますまいよ。」

「大丈夫よ。間に合はなかつたら、停車場の前から自動車で歸るわ。」

「だつてこんな雪ですのに、もしものことがあつたらいけませんわ。」

「しかし電報をやつたのに何故歸らないなんていはれると、後で困りますもの……。兎に角爺ぢいやに俵はたけを呼ばせて頂戴……。」

優梨子が如何しても聞き入れないので、お鳥は仕方なしに別莊番の爺ぢいに吩咐いっせけて、俵はたけを呼ばせた。

優梨子は帶を締め直したり、手提袋の中に何か入れたりしてゐるたが、外の闇の中で荒れ狂つてゐる風の音を聴くと、さすがに心配さうに眉を顰しりぞめた。

「風も雪もだんだん酷ひどくなつて來たわね。鎌倉でこんな大雪が降るなんて……。珍らしいわ。」

「ええ、ほんとにこの工合ぢやあ今夜するぶん積りますわ。ねえ、奥さま。ほんとに途中でもしものことがあるといけないから、今夜はここにお泊りになつて、明日の朝早くお歸りになることになさいましょ。」



「ええ、しかし……。優梨子は暫く考へてゐたが思ひ切つたやうに「あたし如何しても歸るわ。電報を打つて寄越す位だからきつと何か變つたことが出來たのに違ひないんだから……。」

さう云はれるとお鳥もさう強いて留める譯にも往かなかつた。唯何となしに不安を感じながら、背後からコートを着せ懸けたり何かしてゐたが、そのうち別莊番の爺は俵が來たことを知らせて來た。

「それぢや氣を付けてね……。自分の家だと思つて、遠慮せずに養生なさいよ。」

さういひながら優梨子は手提袋を持つて立ち上がった。

「難有うございます。御親切は一生忘れません。」

お鳥も涙含みながらさう答へて、優梨子の後から見送りに立つた。

女關には看護婦も別莊番の爺も見送りに出てゐたが、扉を開けるとぢつと手で搦んで擲き付けるやうに、まるで灰のやうな粉雪が、風と一緒に吹き込んで來た。

「まあ、ひどい雪だこと……。。」

優梨子はさう呟くやうにいひながらお鳥の方を振り返つて、

「また熱でも出るといけないから、早くあつちの風の當らいところいらつしやいよ。」

「ええ……。お鳥はさういつたまま、やつぱり不安さうな顔付でそこに突つ立つてゐた。

「ねえ俵夫さん。大丈夫か知ら……。。」

幌の中から優梨子の聲がすると、もう梶棒を上げ懸けてゐた俵夫は勢よく、

「ええ、大丈夫です。後押を付けましたから……。。」

といひながら、しんしんと夜目にも白く降り頻つてゐる雪を衝いて走り出した。

「左様なら。どうぞお氣をお付けになつて……。。」

さういふお鳥の聲は、吹き込んで來る風に吹き消されて、幌の中に縮こまつてゐる優梨子の耳には聴こえなかつた。

何處かではさりと雪の落ちる音や吹き飛ばされて來た鳥の鳴聲などが聴こえて、海鳴の



音が一層もの凄く高まつて往つた……。

と、優梨子が歸つて往つてから、ものの三十分も経つたかと思はれる時分だつた。お鳥はもうこの時床に入つて、丁度體温を取つてゐるところだつたが、不圖またさつきよりも激しく、玄關の扉をどンドン割れるやうに敲く音がするのを聞いた。

「おや、今時分誰なんでせう。」

お鳥は不安さうにさう看護婦に向つて眩きながら、床の中に起き上がつて耳を澄ました。

## 四

「おい、開けんか。早く開けんか。」

扉を激しく敲きながらさう嗚るやうにいつてゐる聲は、海鳴うみなぎの音に紛れてしまつて、はつきりは聞き取れなかつたけれども、まさしく東海林の聲に違ひないと云ふことだけは

分つた。

「おや、旦那様だよ。」

「ええ……。看護婦も耳を傾けてゐたが、如何もさうらしいございますね。」

玄關の扉を開ける音がして、暫く別荘番の爺やと何か話し合つてゐる聲がしてゐたが、そのうち重い蹠音おしおとが廊下の方に聴こえてそれが襖の外で留まると、

「如何ぢや。こんなに雪の降る晩は寂しいぢやらう。」

といふ聲と一緒に、東海林が茶の間に入つて來た。そして大分酔つてゐるらしいとろんとした目で、襖を開けたままになつてゐる直ぐ隣りの、お鳥の寢床の敷いてある部屋の方を覗き込んだ。

「おや、いらつしやいました。」

お鳥は床の上に座り直して、かういひながら頭を下けたが、電報まで打つて寄越して、優梨子を東京へ呼び迎へた東海林が、優梨子が歸ると一と足違ひといつても好い位に、し



かもこの大雪の中を、ここにやつて来たといふことが、如何も不思議に思はれてならなかつた。

「あのう、何處かで奥さまにお會ひになりませんでしたか。」

「いいや、會はんよ。まあ、優梨子のことなど如何でも好いぢやないか。」

さういひながら東海林は茶の間の長火鉢の前に来て、どかりと崩れるやうに大胡座おほくらをかいたかと思ふと、ふうつと酒臭い息を吐いた。

「しかし、旦那様は電報でお呼び寄せになつたのでせう。」

お鳥が寢床から立つて羽織を着て、長火鉢の傍へ来て座りながら訊いた。

「うん、呼んだよ。優梨子はあの電報を見て直ぐに歸つたのか。」

「ええ、何の用だらうつて云つて大變心配していらつしやいましたわ。」

「さうか。なあに心配するほどのことでもなかつたんだが……。」

「さうでございますか。わたくしは今夜たいへんな大雪ですから、明日の朝早くお歸りに

なつたら好いでせうと申し上げたんですけれど、電報を打つて寄越す位だから、何か變つたことでも起つたんだらうつておつしやつて、急いで歸つていらつたんですの。」

「さうか。そりやあ歸るのが當り前ぢや。」

東海林はさういつてから氣を變へるやうにお鳥に向つて、

「如何ぢや、體の工合は……。大分血色も好いやうぢやが……。」

「ええ、こちらにまゐりましたから、大變工合が好いやうでございますの。」

「そりやあ何よりぢや。熱もあんまり出んやうかな。」

「ええ、すっかり平熱になつてしまひました。」

さういつてから不圖氣が付いたやうに「ああそれから先き程は結構なものを難有うございました。」

「うん、如何だつた、あの葡萄酒は……。あれはちよつと珍らしい葡萄酒で、中々うまい筈なんだが……。」



「さうでございますか。何だか勿體ないやうな気がして、まだそのままになつてをりますの。」

「さうか。それならちよつと一口やつて見るが好い。わしも一杯お交際つきあひひをしよう。」

東海林はさういつてから、そこに置いてあつた葡萄酒の罎かみに目を付けて、手を伸ばして取り上げてから、

「ちよつとこれを開けて来て下さい。」

といつて看護婦に命じた。看護婦が出て往くと、何だか白けたやうな沈黙が暫くの間續いた。で、そつと海嘯つなみでも押し寄せて来るやうな海鳴の音がもの凄じく聴こえて、雨戸が外れはしまいかと思はれるほど強く吹き當てる疾風はやてはひとしきり家を撼うごかしながら過ぎて往つた……。

「おや……。」

しんしんと降り頻つてゐる雪の氣勢けいはいが感じられると、急に肩の邊から寒さが襲つて来る

やうに思はれて、お鳥が不圖何の氣なしに襟を搔き合せやうとした途端、大雪で何處かの電線が斷れたものと見えて、すうつと音もなく電燈が消えて、部屋の中は眞つ暗になつた。はつと思つて氣が付いて見るとお鳥の手は、さつきから機會を覘うかがつてゐた東海林の逞たくまましい手に、もう何時の間にか掴まれてゐる……。

お鳥の耳には、ごおつと急に高くなつた海鳴の音が、まるで悪魔の叫び聲のやうに聴こえた……。



## 正義の爲めに

春は来たが「鳩の家」の正月は寂しかった。

やつぱり耶蘇だといふことに極められてしまつて、もう今では誰一人講話を聴きに来るものもなくなつてしまつたから、能島は自然無抵抗主義の宣傳の方は粗略ざろそがになつて、近頃ではこゝに移つて来てから手をつけ始めた貧民研究の方に深い興味を持つやうになつた。能島のかうした學究的な態度と、大川の燃えるやうな實行的の情熱とは、日を経るに従つてだん／＼背き合はずにはゐなかつたが、しかし幸ひにもまだ最後の破局を持ち來すやうなことは起らずにゐた。で、二人は何となく氣まづい生活を續けてゐるうちに春を迎へ、

今ではもうその寂しい正月も終らうとするのに間近かつた。

大川はその後幾度かお鳥を病院に見舞に往かうと思つて、その近くまで出懸けて行くこともあつたが、しかしいざ門を入らうとするとあの黄金そのものといつたやうな東海林の顔や、汚らはしくもその黄金に身を賣つた妹の優梨子の顔が目の前にちらつて、何か目に見えない力があつて引き戻すやうに足が竦んだ。そして最後に、春になつて門松が取れてからやつと思ひ切つて訪ねて行つた時には、昨日退院したといふ翌くる日で、到頭とうくお鳥に逢ふことが出来なかつた。例の佝僂の弟の新吉に訊いたら、退院してからの往つた先が分るだらうとは思つたが、それもあの晩こゝに泊つて能島の時計を盗つて遁けたきりまるで姿を見せなかつた。

能島は春になつてからも相變らず貧民研究に没頭してゐた。毎日寒い風も厭はずに、無料宿泊所の箱船屋を訪ねたり、龍泉寺りゅうせんじの方へ出懸けて往つたり、或ひはわざ／＼十二階の下の魔窟まくに藻練りもねり込んだりして、しきりに何か著述の材料らしいものを蒐めてゐるが、



時に依ると歸つて來てから、飯も食はずに、壁に懸けられてゐる例のトルストイの寫眞の前で、ほんやり考へ込んでゐることもあつた。

と、正月になつてから始めての大雪が降つて、それがまだ路次の日蔭や屋根の隅に、班らに残つてゐる時分だつた。その日も能島は朝早くから、何か用ありけに慌ただしく出懸けて往つて、大川一人で留守をしてゐるが、かういふ時にお鳥のことを考へると、何だか急に逢ひたくなつて、何となく遺瀬ゆりせのないやうな心持がするのだつた。

「お鳥はあれから如何したのだらう。退院をしたといふからには、體は快くなつたのに違ひはないが、しかし體が快くなつたところであの境遇ぢやあ仕方があるまい。あゝおれは何故かう弱いのだらう。病院にゐる間に救ひ出さうと思へば如何にでも出來たのだが、先づ最初東海林に出合つて、すつかりあの黄金の力に壓倒されてしまつたぢやないか。何故病院から遁け出したのだ。心の中で罵つただけで何となる。卑怯だ、卑怯だ。おれはほんとに卑怯者だ。」

大川はこんなことを考へてゐるうちに、不圖懐かしくこの間手紙を呉れた友達友達の平野の顔が目に浮んで來た……。荒削りの彫刻のやうなその頬と、力強く結んだその口と、燃えるやうな熱を持つたその目と……。

「あゝ、あの手紙は如何したらう。病院の看護卒を止めて勇ましく人生の戰場へ出ると書いてあつたが。」

大川はそう思ひながら、慥かにこの抽斗ひきかに入れて置いたと思つて、トルストイの寫眞の前の机の抽斗を開けて、奥の方まで手をつ込んで探して見た。が、その中には能島が書き懸けの原稿紙や何かと一杯入つてゐて、ちよつと見たいと思ふ手紙は見付からなかつた。で、抵悟もどかしさうに慥かに入れて置いたと思ふ方の抽斗を抜いて、机の上に中のものを撒くやうに開けて、ひとつ／＼檢べて往つたが、そのうち彼は不圖その中から、妹の優梨子から能島に宛てゝ出したらしい手紙があるのを見付けた。

「おや、これは優梨子の字に違ひないが……。」さういひながら封筒の裏を返して見て、「な



んだ、昨日の日附だ。」

## 二

「何だらう、何を妹はいつて寄越したのだらう。」

さう思ふと同時に、大川は能島がこの手紙の来たことを彼に黙つてゐるといふことが、何となく水臭いやうな気がして不愉快になつた。で、やゝ反抗的な心持から、關かまはないから見てやれといふやうな氣になつて、そつと中の手紙を引つ張り出した。と、それは思つたよりも短い文句で、是非あなたの手で救つて頂きたいことがあるから、お目に懸かつてお話がしたい、就ては明日あすの朝東京驛のステーションホテルまで来て呉れといふ意味のことが書いてあつた。

大川はこの手紙を読むと、自分が能島から賣られたやうな気がして、激はげしい憤りを感じずにはゐられなかつた。自分にこの手紙が来たことを黙つてゐるので見ても、また今朝妙

に慌たゞしく出懸けて往つた素振から見ても、能島が彼に隠れて、妹のところへ逢ひに往つたことは慥かに事實のやうに想像された。

「誘惑だ、誘惑だ。これが誘惑でなくて何であらう。」

大川はもう一度手紙を繰り返して讀んでから、腹立たしげにかう心の中で叫びながら、能島の身の上を危ぶんだが、しかし考へて見ると妹よりも彼に隠れて優梨子のところに逢ひに往つた能島の方が、この場合一層憤ろしかつた。

「よをし……。もうおれはこゝにはゐられないぞ、丁度好い機會だ。直ぐにこゝを出て往かう。」

大川はさう決心すると同時に、急いで机の上のペンを取り上げて、思ふところがあつて自分は自分の路を往くことにしたといふやうな意味の手紙を書いた。そして慌たゞしくそれを封じ終ると、今見出した妹の手紙の上に、その手紙を重ねて置いて、奥の押入から着換きかへの着物を包んだ小さな風呂敷包ふしを取り出すと、それを片手にぶら下げたまゝ、ふらつと



外へ出やうとしたが、丁度壁に懸けてあるトルストイの寫眞の前まで來ると何故か惹き着けられるやうに足が留まつた。

「ふん、この寫眞にもお別れだよ。」

彼はさう思つてぢつとその寫眞の上に目を注いだ。深い窪んだ鋭い光を持った目、不恰好に尖つた隆い鼻、長く胸を蔽ふまで垂れた髯——それはいつも見慣れてゐる顔であるが、今日は何となくひどく懐かしいもののやうに思はれて、その目にも、その鼻にも、その髯にも、強く心が惹き着けられた。ちよつと見ると怖ろしいやうに思はれる顔ではあるが、ぢつと凝視めてゐると、その目は慈悲のために輝き、その唇は愛のために燃えた。

大川はかなり長い間この寫眞の前に立ち盡くしてゐるが、暫くすると不圖氣が付いたやうに心の中で、

「左様なら……。トルストイの叔父さん。」

と懐かしさうに呼び懸けてから、ふらつとこの「鳩の家」を出て往つたのだつた。

それから一時間ばかりの後、大川の例の青い職工服の姿は上野の停車場の前の廣場に見られた。彼は「鳩の家」にゐる間は、兎に角能島が僅かに暇を偷んで書く原稿を賣つた金で、やつと二人の口を糊すること位は出來たのだが、かうしてあすこを出て來て見ると、何か職業を求めなければその日の生活にも困らなければならなかつた。で、彼は最初は直ぐに黒船町にある救世軍の職業紹介所に往つて見やうかと思つたが、そこには能島がちよくちよく貧民研究の材料を蒐めに出懸けると思ふと、偶然出會つた場合を想像されて、何となく往く氣になれなかつた。それで彼は公園の方に出ると、ほんやり瓢箪池の周りをぐるりと廻つて、それからぶらぶら上野の方を差して歩いて往つた……。

「上野の近所には口入屋のやうなものが澤山あるといふ話だが……。」

彼はさう思ひながら、兩側の家に目を留めて歩いて往つたが、それらしい家はまだ一軒も見當らないうちに、何時の間にか上野の停車場の前の廣場に出てしまつたのだつた。

「これから如何したら好いだらう。」



大川はさう思つて、自分の見窄らしい身装を顧みだが、しかし見懸けは一個の敗残者のやうな姿をしてゐても、今日は心にも肉體にも何となく新らしい力が漲つてゐるやうに感じられてゐた……。

で、格別焦つて職を求めなくとも好いやうな氣がして、ぶらぶらまた停車場の前の廣場を、廣小路の方へ歩き出したが、丁度公園前の停留場の傍まで來ると、彼は不圖今電車を降りやうとしてゐる、ここで會はうとは思ひも懸けない男の姿を認めて、思はず目を睜つて立ち留まつた。その男は小倉から彼に手紙で人生の戦場へ出るやうに勧めて來た平野だつた。

と、向ふでも彼の姿を認めて、懐かしさうに走り寄つて來たかと思ふと、逞ましい手で彼の肩を掴みながら、

「如何した。」  
と一言力強くいつた。

「平野。貴様は馘首れたな。」

さういふ大川の聲には熱い友情が籠められてゐた。

「うん……。馘首れた。如何して分る。」

「そりやあ友達だ。一目見れば直ぐに分るよ。」

ぢつと見交はしてゐる二人の目は、一三度瞬きをしたかと思ふと涙が浮んだ。

三

「ずるぶんしばらく會はなかつたな。」

暫くすると平野は大川の顔をぢつと凝視めながら懐かしさうにいつた。

「うん……。で、君は何時東京へ來たんだ。」

「今着いたばかりさ。兎に角これから何をしても東京でなきやあ駄目だと思つたから、馘首になると直ぐその晩發つて來たんだ。」



「さうか……。よくみんな騒がなかつたな。」

「いや、みんな何かやつてるやうだつたが、僕はきつとまた誰かに裏切られて不愉快な思をするに極つてゐると思つたから、ひとつはその渦中からも遁けて来たんだよ。」

さういつてから平野は、大川の見窄らしい身装を傷ましさうに見遣りながら、

「如何だ。もうそろ／＼午時分だから、久しぶりで何處かで一緒に飯でも食はうぢやないか。」

「うん……。しかし僕は一文なしだからなあ。」

「何だい。憐れなことをいふなよ。馘首になつたお蔭で僕は今のところ金は大分持つてるんだ。ここんところちよつと僕はブルジョアなんだよ。ははははは……。」

さういはれると大川は何だか自分で自分が嘲笑ひたいやうな氣持がして、同じやうに聲を合はせて笑ひながら、

「はははは……。あんまりたいしたブルジョアでもなささうだが、兎に角馘首代で御馳走

になるとしやうか。」

「うん、よし。今日は久しぶりだからうんと飲まう。僕は早くこんな金は遣つてしまひたくつて仕方がないんだ。」

「はははは……。そこがプロレタリアの美德なんだよ。」

「まあ、何でもいいや。何處か手近のそこらの家に入らう。」

二人はこんな話をしながら直ぐ上野の山下の電車通りに向つた大きな牛肉屋に入つて往つた。「いらつしやい」といふ頓狂な聲と、がら／＼鳴らす下足札の音とに迎へられた二人は、直ぐに階子段を登つた表二階の広い座敷に案内された。客は二人の外に、向ふのすと隅の方に吉原歸りらしい一組があるばかりで、座敷の中はうそ寒いほどがらんとした。

「おい、姐さん。ロースにそれからお銚子の熱いやつを持つて来て呉れないか。」

平野はそこに座ると直ぐさう女中に吩咐してから、改めて大川の方を向いて訊いた。



「如何したんだ、君は……。いよいよあすこの家を出てしまつたのかね。」

「うん……。君から手紙を貰つた時分から、だん／＼あすこの家で、あの能島といふ人と一緒に仕事をするのが厭になつて來てゐたんだがね……。しかし顔を會はして見ると、何だか氣の毒になつて、出るといふことがいひ出せなかつたんだ。」

「それで君は今まだあすこの家にゐる譯なのか。」

「いいや、實は今日も今から一時間ばかり前に、遁けるやうに置手紙をしてあすこの家を出て來たんだよ。それにはいろ／＼事情もあるが、詳しいことはいづれ悠くり話すとしよう。」

「さうか……。いよくあすこの家を出てしまつたのか……。」

そこへ女中が鍋やら銚子やらを運んで來たので、暫く平野は押し黙つてゐたが、やがて女中が往つてしまふと、急にきつと顔を上げて、

「それぢやあいよく君は僕が手紙で勧めた通り、人生の戰場へ出やうといふ決心をした

のだね。」

「うん……。僕はもうあの能島先生の無抵抗主義に、倦き／＼してしまつたのだ。ありやあ、君、無抵抗主義ぢやない、無感情主義だよ。この間も公園にゐる鐵の爪の定吉つて破落戸がやつて來て、打つたり蹴つたりされたんだが、それでも怒りもせず黙つてするがまゝに任せてゐたんださうだ。僕は歸つて來てその話を聽いて、憤慨するよりもむしろ呆れてしまつたね。全く馬鹿々々しくつて話にも何もなりやあしない。」

「はははは……。そいつは君の氣性としちやあ堪らないだらう。しかし、まあ、よく、今まで辛抱したよ。さあ、まあ、人生の戰場へ出る門出の祝ひに一杯差さう。」

さういひながら平野が差した杯を、大川はひどく嬉しいやうな心持で受け取つて、

「やあ、難有う。こんなうまい酒を飲むのは久しぶりだよ。」

「おや、おや、心細いことをいふな。」

「はははは……。ところで君の何を祝つたら好いかな。謹んで觥首を祝することにしやう



曉

か。

「うん、それがいい、それがいい。」

「それぢやあ謹んで平野重介君の敲首を祝して一杯献じやう。」

「やあ、有難う、有難う、兎に角かうして浪人になつて見ると、何だか急に暢々した氣持になつて愉快だよ。ねえ、大川君。君だつてさうだらう。」

「うん、しかし暢々した氣持になるには、懐が少し寒いやうな氣がするよ。」

「何だい吝なことを云ふない。さあ、もう少し飲んで元氣を附けるよ。」

平野は銚子を取り上げて、大川の前に置いてある杯に波々と酒を注いだ。鍋はぐずぐず煮え立つて来て、表の障子の磨硝子には、淡い日が仄黄いろく射し始めた……。

## 四

一時間経つか経たないうちに、二人の前にはもう十本近い銚子が並べられた。平野も大

川ももうかなり酔つて、聲は二人ともひとりで高調子になつて來てゐた。が、客はあれから二組ばかりあつたが、みんな可なり離れたところにあるので、二人は遠慮なくいろいろのことを話すことが出來た。そのうち話は當然これからの二人の生活問題の上に落ちて往つた……。

「で、君は如何するんだい。やつぱりこれから先きも、これまでのやうな職工生活を續けて往かうと思つてゐるのかね。」

大川がさう訊くと、平野は強く點頭いて、

「うん、僕はやつぱり續けて往くつもりだ。そして今度職工生活を始めるに就ては、僕は頗る大きな抱負があるんだ。」

「大きな抱負……。何だい、その抱負つていふのは……。」

「うん、その抱負か……。」

平野はさういつてから、手酌で一杯注いだ酒をぐつとうまさうに飲み乾してから、

迷へる人々



「その抱負つていふのは……何だよ。……おれはこれから正義の爲に戦はうと思つてゐるんだ。」

「正義の爲に戦ふ……それはあつちにある時分にもよく君の口から聴かされた言葉だ。今更君の大きな抱負として聴かされるのはをかしい位のものだ。」

「うん、しかしあの時分いつてゐたのと、今君にいふのとでは、言葉の意味が違ふんだ。あの時分は相手もなしに、唯漠然とさういつてゐたのだが、今度こそ僕は戦ふ相手が出来てさういつてゐるのだ。」

平野がさう昂然としていふ言葉には、酔つてはゐるながらも大川は耳を傾けずにはゐられなかつた。

「戦ふ相手といふのは如何いふ奴等だ。」

「うん、その相手か……」暫く黙つてゐたがきつぱりした調子で、「ひとつは所謂資本家といふ連中だ。」

「うん、それから……。」

「もうひとつは、これまでは一緒の仲間だつた職工達……資本家に對照していへば労働者だ。」

「ふん……君はこれまでの仲間とも戦ふのか。」

「うん……戦ふ……。正義の爲にあくまでも戦ふ……。」

「つまり左右ともに敵といふ譯だね。」

「いや、敵ぢやない、ともに味方だよ。僕には敵と思ふものは一人もない。」

大川は何だか平野のいつてゐる言葉が、だんく謎のやうで分らなくなつて來た。

「何だへ、君は酔つてゐるのか。何だか君のいふことは分らないぢやないか。」

と、平野は怒つたやうな調子で、

「分らないといふことがあるものか。君には分らないかも知れないが、僕にはちやんと分つてゐる。いゝか。今の状態では資本家にも悪いところがあれば、労働者にも悪いところ



鐘 曉  
がある。それだから僕は資本家をも労働者をも敵としてゐるんぢやない。唯兩方の悪いところを敵として戦はうといふのだ。」

「うん、さうか……。分つた、分つた。そりや至極賛成だよ。」

「賛成だらう。それだから僕はさつきから正義の爲に戦ふんだといつてゐるんぢやないか。正義……正義……僕は正義の軍を起さうつていふんだよ。如何だ。君も来て僕の正義の軍に加はれ……。僕は一人でもいゝと思つてゐたんだが、君が加はつて呉れ、ば萬々齒だ……。」

平野はさういつてから、二人の前に置いてある杯に、溢れるほど一杯酒を注いで、

「さあ、正義の爲に乾杯しやう。」

「うん……よし……正義の爲に……。」

二人は同時に杯を取り上げて、ちつと燃えるやうな目と目とを見合せながら、感激のため顫へる手で、杯を唇の方へ運んだ二人の目からは涙が頬を傳はつて流れ落ちた……。

## 地を戀ふ心

### 一

もうそれは正午に近かつた。

東京驛のステーションホテルの女關の正面にある昇降機がすうつと音もなく降りて來てがちやりと留まると、檻のやうなその箱の中から出口の鐵の扉の開くのを待ちかねたやうに能島が蒼ざめた顔付で慌たどしく出て來た。そしてまるで何か怖ろしいものにも追はれてゐるやうな様子で、遁けるやうに女關を出ると、足早に停車場前の廣場を、大手町の方へ急いで住つた……。

能島は何故優梨子から手紙が來たことを大川に黙つてゐたか、そして何故大川には何も



相談をしないで、こつそり優梨子を訪ねて往つたか。それには二つの理由があつた。

一つは彼の女に對する愛着あいぢやくからだつた。能島は下の關の講演會で始めて優梨子に逢つた時から、彼の女に對してはかなり強い愛着の念を持つてゐたのだが、この間わざわざ彼の「鳩の家」を訪ねて来て、彼の事業のために金を寄附するといはれた時には、たとへそれがどんな金にもせよ、彼は優梨子の志を嬉しく思はずにはゐられないのだつた。しかしその時は大川が傍にゐて、汚らばしい賣女ばいぢやくのやうに彼の女をいふので、彼も仕方なしに合槌を打つてゐたが、それは彼の心の奥底から出た言葉ではなかつた。それだから彼は優梨子から来て呉れといふ手紙を貰ふと、大川には何ともいはずに、喜んで彼の女を訪ねて往つた。

もう一つは彼の女に事業上の相談があつたからだつた。事業といふのは外でもない。近來彼が貧民研究に没頭するやうになつてから思ひ付いたことで、これまでも多くの人に依つて企てられたことではあるが、彼は今度自分が研究の結果考へ附いた新しい方法で、

病院やら食堂やら葬祭場やら宿泊所やらを一緒にした、一種の貧民會堂を造らうといふのだつた。それには無論かなり巨額の金が必要なので、その寄附金を募る方法なり何なりを、丁度来て呉れといふ手紙が来たのを幸ひ、先づ最初彼の女に相談をして見やうと思つた。で、能島は朝八時頃馬道うまみちの家を出たのだが、途中黒船町くろふねまちの救世軍の無料宿泊所に寄つたり何かしたので、ステーションホテルに着いのはもう十時近くになつてゐた。

「東海林つて人の奥さんが泊つてをられる筈ですが……。」

といつて訊くと直ぐに分つて、三階のすつと端はしの方にある彼の女の部屋へ案内された。外から扉ドアをノックすると、「お入り遊ばせ……。」といふ艶めかしい言葉が、何となく彼の心を魅するやうに中から聴こえた。

それから二時間——十二時近くまでの可なり長い時間を、彼はその部屋の中で如何にして過ごしたのか。そして彼は何故あんなに慌ただしく遁けるやうにホテルを出て往つたのか。それは能島がまるで豫期してゐなかつたやうな怖ろしい誘惑が、そこに待ち受けてゐ



たからだつた……。能島は停車場前の廣場を大手町の方へ急ぎながらも、

「誘惑だ……誘惑だ……。怖ろしい誘惑だ……。」

と、幾度か心の中で呟いてゐた……。

能島は扉をノックして、「お入り遊ばせ……。」といふ艶めかしい言葉を聞いた時から、可なり誘惑を感じてゐたのだが、部屋の中へ一步踏み込んで見ると、彼は思はず目を睜らなければならなかつたほど艶めかしくも美しい、燃えるやうな長襦袢を着た優梨子のしどけない嬌態をそこに見出さなければならなかつた。寢臺の傍の卓の上には、琥珀色の妙にどろどろした媚薬のやうな酒の罎が置いてあつて、それまで誰かそこにゐたものと見えて、リキュルグラスが二つ、その罎の傍に轉がつてゐる……。

と、優梨子は能島の顔を見ると、びつくりしたやうに起き上がつて、

「まあ、あなたでしたの。」

といつたが、しかし別に着物を着換へるでもなく、長襦袢一枚の艶めかしい姿のまま、

直ぐに洋杯に酒を注いで彼に勧めた。

「ねえ、一杯召し上がらないこと……。」

その目、その髪、その頬、その唇——彼の女の顔の何處を見ても、そこには愛慾の火が狂ほしく燃立つてゐた。その肩、その手、その胸、その足——彼の女の體の何處を見ても、そこには情嫉の焰が凄まじく風に煽られてゐた。と、うつとりそこに突つ立つてゐる間に、ぴいんと扉に鍵を懸ける音がして、彼はもうその部屋から脱け出すことは出来なかつた。まるで蜘蛛の網にかかつた蟲けらのやうに……。

「誘惑だ……誘惑だ……怖ろしい誘惑だ……。」

能島はもう一度かう心の中で呟いたが、やつとの思ひでこの誘惑から免れて、今かうして大空の下を歩いてゐるのだと思ふと、何となく薄濁りのした雲を洩れて仄かに射して來る淡い日の光も嬉しかつた。

能島はまだ何ものにか追はれてゐるやうな心持で、方向も確めずに慌ただしくそこに來



た電車に乗った。

二

能島は家に歸るまで怖ろしい誘惑のことばかり思ひつゞけてゐた。電車に乗つてゐる時でも、往來を歩いてゐる時でも、彼はまだ優梨子が何處からか誘惑の白い手を伸ばしてゐるやうな気がして仕方がなかつた。彼の目には不圖幻まぼろしのやうに、艶めかしい彼の女の長襟袵姿が映つて來るかと思ふと、彼の耳には不圖また夢のやうに、

「あたしはこんなに思つてゐるのに……。」

と恨めしげにいふ彼の女の聲が聴こえて來た。

が、やつと馬道の家に着いて、赤く塗つた表の硝子戸をがらりと開けると、彼は始めて安心したやうに、ほつと吐息をつくことが出來た。この場合彼の魂を救つて呉れるものは、あの壁に懸けてあるトルストイの寫真より外何もなかつた。落ち窪んだ眼窩めくぼの底に輝いて

るる目——ちよつと見たところ怖ろしいやうに見えて、それでゐる無限むげんの愛を湛へてゐるあの目より外何もなかつた。能島は家に入るなり馳せ寄るやうにその壁の前に近付いて往つて、ぢつと訴へるやうにそこに懸けてあるトルストイの寫真を凝視めた。彼はぢつとその目を凝視めてゐるうちに、體までがだんだん温くなつて來るやうな不思議に力強い愛が感じられた……。

しかし能島はそのうち不圖、今彼が優梨子に對して取つた態度が、果して杜翁とせうのいふところの無抵抗主義になつてゐるか如何かといふことが疑はれて來た……。この間鐵の爪の定吉が、ここに暴れ込んで來た時と同じやうな態度を、今日若し彼が優梨子に對して取つたならば如何であらう。あの力強い誘惑に果して打ち克かてたであらうか、如何であらうか。

「惡に抗する勿れ……惡に抗する勿れ……。」

彼は呪文を唱へるやうにさう口に出して呟いてから、微かに首を振りながらトルストイ



の寫眞から目を離した。そして机の前の椅子に腰を下ろさうとした時、彼の目は圖らずも机の上に置いてあつた、大川の書き残して往つた手紙の上に落ちた……

「おや……。何だらう。」

能島はさう呟きながら、その手紙を取り上げたが、それが大川の字だといふことが、分ると、或る暗い寂しい豫感が、すうつと冷たく彼の胸を通り過ぎて往つた……

「さうだ。きつと大川は僕を棄てて往つたに違ひない……。」

彼はさう思ひながら可なり長い間、封を切るのを恐れるやうな心持で、ちつとその表書を見ながら逡巡つてゐた。そして暫くしてからやつと封を切つたが、もつといろいろのことが書いてあるだらうと想像された手紙には、唯簡單に自分は自分の路を往くと云ふやうな意味の文句ばかりしか記されてなかつたので、それにも彼は或る寂しさが感じられた。彼はちつとその手紙の文字の上に目を注いでみると、だんだん臉の裏が熱くなつて來るのを感じた……。

能島はちつと目を閉つて、自分で自分の體を抱擁するやうに、堅く兩方の腕を組んだまま、何時までも何時までも身動きもしずに何ごとか深く考へ込んでゐた。  
「おれはこれから如何したら好いだらう。」

たつた一人取り残されて見ると、彼は先づかう考へずにはゐられなかつた。「愛の福音：無抵抗主義……傷ける鳩……大川眞吉……貧民研究……新しい事業……」そんな言葉が彼の頭の中を通り過ぎて往つたが、それはもう今となつては、みんな空しい白紙に等しい文字ばかりだつた……。

「人を救はうとしたのが悪かつたのだ。神とならうとしたのが悪かつたのだ。これからは神とならうと思はないで、先づ人とならうと考へなければならぬ。それには何よりも先きに人と一緒に働くことだ。」

かう思ふと彼の頭に、不圖輝くやうに閃いたのは、新しき村を作らうといふ考へだつた。「武者小路君が日向に作つてゐるやうな新しい村を、おれは自分の郷里に作つてやらう。」







の態は何だい。」

「全くちよつと才人の末路つて気がするね。近頃妙な雑誌に出す隨筆めいたものを讀んで見ても、何だか影が薄くなつたやうな気がするよ……。」

「ありやあ、何だね。やつぱり書く一方でやつてゆけば好かつたんだね。それがあんな實行の方面に入つて往つたから、それであんなになつてしまつたんだよ。」

「實行の方面……何かやつてゐるのかい。」

「ああ、君はまだ知らなかつたのかい。やつてゐるどころか、先生今はもうさういつた方面に没頭しきつてゐるんだ。」

「何だい、それは……。」

「無抵抗主義の宣傳さ。僕はまだ往つたことはないが、淺草の公園の裏の方に、小さな説教所のやうなものを造つて、そこで何かやつてゐるんださうだ。」

「無抵抗主義か……。ありやあ先生の御得意のやうで、僕は下の關の講演會で聞いたこと

があるよ。」

その言葉を聽くと能島は「誰だらう、下の關でおれの處女講演を聞いたのは」と思つてちよつと振り返つて顔を見てやりたいと思ふ心持に強く彼の心が惹かれた。聲に聽き覺えのあるところから見ると、名もなき文學青年でもなささうだつたで、その上自分の批評を聽くのは堪へられなかつたので、わざと存在を示すやうに振り返つて見ると、丁度こつちを向いて何かまだ饒舌しゃべらうとしてゐる漂泊の畫家でグダイストを以て任じてゐる北田胡沙雄と、ぱつたり顔を見合せてしまつた。

「あつ……。」

北田は意外にも、今自分達の話頭に上つてゐる能島辰雄その人が、直ぐ隣りの卓子にゐるのを發見して、びつくりして叫ぶやうに聲を立てた。そしてちよつと間が悪さうに微笑をしながら、

「能島さん。人が悪いぢやありませんか。早くそこにゐることを知らせて呉れりやあ好い



の……知らないもんだからいろいろあなたの噂をしてゐたところですよ。」

能島はかういはれるとやつぱり同じやうに、微笑を面に浮べないではゐられなかつた。

「いや、中々面白かつたよ。自分の批評つてものは中々聴かれないものだよ、今日は丁度好い機會だつた。實はね、僕は今日今の話の中にあつた淺草の家を疊んで、これから國へ歸るところなんだよ。」

「へえ……。國へ歸られるんですか。」

「うん、歸る……。もう東京が厭になつた。いや厭はなつたと云ふよりか、何だか都會に住んでゐるのが怖ろしくなつて來たんだ。」

「さうですか。で、あなたのお國はどちらなんです。」

「僕の國は静岡の少し先きだよ。」

「静岡……僕も七時の汽車で静岡の方へ往かうと思つてゐたところなんです。」

北田は同伴者が出來たのを喜ぶやうに、懐かしさうな調子でいつた。

「さうか。そりやあ丁度好い。一緒に往かう。しかし相變らず君はギヘミアンライフを送つてゐるのかね。」

「まあ、僕は死ぬまでかうして旅から旅と漂泊歩いてゐるのでせうよ。」

さういふ北田の顔の上に、もう自暴自棄を通り越して、絶望に近い傷ましい色が浮んでゐた。

## 四

汽車はかなり混んでゐるが、それでも二人は丁度向ひ合つた席を取ることが出來た。北田と一緒にゐた連中は、所謂民衆派の詩人達で、蔭では悪口をいひながらも、能島の書いたものには、相當の敬意を拂つてゐたから、かうしてたつた一人で寂しく東京を去つてゆく彼の姿を見ると、みんな妙に感傷的な心持になつて汽車が動き始めると同時に、

「能島君、萬歳……。」



と涙含んだやうな聲で呶鳴つた。

「ああ、萬歳の聲……。下の關の停車場で自分のために萬歳の聲を唱へて呉れた、あの大川は如何してゐるだらう。」

能島はその聲を聴くと、直ぐに彼を棄ててしまつた大川のことを思ひ浮べずにはゐられなかつた。そして汽車の窓からだんく遠ざかつてゆくプラットホームの灯と、その上のステーションホテルの窓の灯とを眺めながら、厭はしき都會に別れを告げた。

二人は自分達の席に歸ると、何とはなしに顔を見合はせて微笑を取り交はしたが、暫くすると能島は煙草に火を附けながら、

「あゝ、これでいよいよ東京ともお別れだ。僕は或ひはもうこれつきり永久に東京の土は踏まないかも知れないよ。」

と、北田はちよつと皮肉に笑つて、

「はははは、ひどく東京つてところに愛想を盡かしつちまつたもんですね。何か事情があ

るんですか。」

「ううん、別に事情つてほどのことはないが……。何だか急に土の匂ひが嗅ぎたくなつたんだよ。やつぱり土の匂ひは好いよ。都會になんぞ住つてゐて、齷齪してゐる奴の氣が知れないね。如何だい。君はさうは思はないかい。」

「さうですねえ。僕はどつちでもようござんすよ。」

「どつちでも好いは心細いな。しかし、君。都會も好いが、女だけには氣を付けたまへよ。」

「女ですつて……。」

北田はちよつと怪訝な顔付で訊き直した。と、能島は不圖氣が付いたやうに、

「うん、君は下の關の近所になん長くぶらぶらしてゐるから知つてゐるかも知れない。

あの壇の浦のところに森優梨子つて女がゐたらう。」

「森優梨子……。」その名前を聴くと同時に、北田の顔には痙攣のために引つ釣つたやう



な、泣き笑ひのやうな表情が浮んだ。

「知つてゐますとも……。よく知つてゐます。あの女は悪魔のやうな女ですよ。」

「さうか……。君はあの女を知つてゐるのか……。全く君のいふ通りあの女は悪魔のやうな女だ。」

と、北田は詰るやうな調子で、

「如何してまたあなたは、突然あんな女のことをいひ出したんです。」

「うん、そりやあね、都會の女の怖ろしい例に引かうと思つてゐたんだが……。しかし知つてゐるなら、もうあの女の話をするのは止めにしやう。」

「ええ……。止めて下さい。僕はあの女の名前を聽いてさへ堪らなくなります。」

二人はそれつきり口を噤んだ。が、その沈黙は何となく重苦しい、壓し付けられるやうな沈黙だつた……。轟々と鳴りどよめく車輪の響が、妙にすきんすきん頭の芯までひびいて来るやうに聽こえた。二人が目をつらうつらしてゐるうちに、汽車は飛ぶやうに品川、

大森と過ぎて往つた。

と、汽車が丁度けたたましい響を立てて、六郷の鐵橋を渡り掛けてゐる時だつた。北田は不圖目覺めたやうに顔を上げて、

「ねえ、能島さん……。」

「うん……。」

能島も顔を上げて寢惚けたやうな懶さうな聲で答へた。

「あのね、僕考へましたよ。僕もやつぱりあなたと同じやうに何處か田舎へ引つ込みますよ。」

「うん、さうしたまへ。さうしたまへ。君のやうな生活を長く續けてゐたんぢやあ堪らないよ。」さういつてから不圖氣が付いたやうに、「しかし何かね。歸るべき郷里があるのかね。」

「ところが僕にはそれがないんです。父母も同胞も一人もない、僕はたつた一人ほつちの



人間なんです。」

「さうか。それぢやあ、君、如何だ、僕の國に来ては……。實はね、僕が今度國に歸る決心をしたのには、少し思ひ立つたことがあるからなんだよ。」

「何です、それは……。」

「それはね、僕は國に歸つてひとつ新しき村を作りたいと思つてゐるんだ。武者小路君が日向に作つてゐるやうなもの……つまり第二の新しき村を作りたいと思つてゐるんだよ。」

「さうですか。そいつは面白いですね。」

「僕の國はそりやあ好いところだね、山あり、川あり、谷ありで、景色の好いのは勿論だが、氣候なんどの好いつては日本一だつて話だよ。そこに新しき村を作つて、みんな同じやうに働き、同じやうに眠り、楽しい平和な生活をしてゆきたいと思つてゐるんだ。朝の鐘が鳴る……それを合圖にみんな目を覺ます……。第二の鐘が鳴る……それを合圖にみんな野に出てゆく……。ねえ、君ちよつと考へて見ただけでも愉快ぢやあないか。」

「ええ、愉快です、愉快です。僕もどうぞ村民の一人に加へて下さい。」

「好いとも……。それぢやあ一緒に僕の國に來たまへ。」

二人は興奮してしきりに「新しき村」に就て話し合つてゐるが、汽車が箱根の山路に懸かつて、冷たい嵐氣はるきが感じられる時分には二人は、もう何時の間に間にかぐつすり眠込んでゐた。

二人の寝顔には平和を夢見てゐるやうな静けさが、微笑ほほえみんでゐるやうに仄かに現はれてゐた。



第三編

愛の人愛の地



## 春の海

麗らかに晴れた春の日で、油を流したやうにきら／＼と輝いてゐる海に向ふには、遠く安房上総あたりの陸の影が、煙のやうに糢糊として見えた。そして近くには離々として青草の萌えた洲崎の堤が長く續いて、いつも汚ならしく思はれるその向ふの埋立地で燃やす塵芥焼の煙も、今日は何となくひどく長閑かに眺められた。さう云つた春の日の正午頃、この近所にある方々の工場の汽笛が、慵うく眠さうな響を立て始めると、きつと佃島から月島へかけてすつと續いた防波堤の上には、油煙や煤で顔も手足も眞つ黒になつた、青服の男がぞろ／＼出て来て、辨當を食ふものもあれば、ほんやり海を眺めてゐるものもある

……。その時分にはさつきまで防波堤の上やその近くの棒杭の上に翼を休めてゐた鷗の群も、もう汽笛が鳴り始めるとこの人達が出て來るのが分つてゐるかのやうに、一羽二羽づゝ飛び立つて往つて、二三丁沖の潑標の周りを、一群になつて飛び廻つてゐた。

と、防波堤の一番端の方に、みんなからは少し離れて、ほんやり鷗の飛ぶのを眺めてゐた一人のやつぱり青服を着た男は、その傍で握飯にむしやぶり付いてゐるもう一人の青服の男に話し懸けた。

「おい、いよ／＼社長が代るつて云ふぢやないか。」

「うん……。戦争最中の好況時代にうんと思惑で買ひ込んで置いた鐵が、減茶々々の瓦落々々下りと來たんで、専務いよ／＼切腹なんださうだ。」

「ふうん、へんなことでその専務なんてものも樂ぢやあねえな。」

「それで今度……。何とか云つたな……。何とか云つた人がこの工場を買つて、今度専務を置かず社長自身で經營するんださうだが、その社長つてやつがどんな奴かな。」



「うん、これまでの専務は好い男だったがあ。」

「しかし、如何だい。僕達が來てから、この工場だつてずるぶん好くなつたぜ。」

「もう職工はみんな僕達正義派になつてしまつたな。ずるぶん悪いやつもゐたやうだつたが……何かつて云ふと直ぐ煽動をしたり何かしたがる連中も、すつかり鳴を鎮めちやつたぢやないか。」

「うん、しかしまだこれからだ、正義のために戦ふのは……。」

かう話し合つてゐるのは大川と平野の二人だつた。二人は上野で偶然邂逅して、あの牛肉屋の二階で正義のために杯を上げてから、半月程ぶら／＼してゐるうちに、丁度この工場で職工を募集してゐたので、それに應じて入つたのだつた。そしてこの工場に入つてから二人はまだやつと二月ばかりの時を過ぎただけだつたけれど、しかしこの間に二人とももうかなり職工達の人望を集めてしまつてゐた。職工達は二人の名前を呼ばずに、もつと親しみのある、やや敬意を含ませた渾名おだなを付けて、獨逸のエエベルトに似てゐると云ふ

ので大川のことを「大統領」と呼び、いろいろなことを識つてゐると云ふところから平野のことを「先生」と呼んだ。

で、二人は思つたよりも愉快に、新しい職工生活を送ることが出來たが、しかし一日の中でも一番楽しいのは、この午休みの三十分だつた。二人は午休みの汽笛が鳴ると、誰よりも先きにこの防波堤の上に登つて、そこでいろいろのことを話し合つた……。

二人は暫く黙つてゐるが、そのうち大川は不圖何か思ひ出したやうに微笑しながら、

「ねえ、おい、平野。君は何だよ、女の方にかけても割合に正義派なんかな。」  
と、平野は怪訝さうな顔付で訊き直した。

「何だ、女の方つて云ふのは……。」

「うん……君はまだ氣が付かないな。この向ふの海岸に駄菓子駄菓子のやうなものを賣つてゐる掛茶屋があるだらう。あすこの娘は君にぞつこんまるつてゐるぜ。」

「馬鹿云ふない。あいつは少し白痴だつて云ふぢやあないか。」



「白痴だから正直だよ。懸引なしに惚れてゐるんだ。」

「はははは……くだらないことをいふなよ。しかし悪い奴があるぢやないか。あんな白痴を瞞だまして孕ませたやつがあつて、一昨年あたり何でも子供を生んだんだつていふぜ。」

「さうか……。可哀さうなことをする奴がゐるなあ。そんな奴こそ先づ正義のために遣つ付けなくちやならないね。」

「それも職工風情ぢやなくつて、何でも何處かの工場の主人なんださうだ。」

「さうか。いよいよもつて怪しからん奴だな。」

と、この時また就業の汽笛が唄い響を立て始めたので、そこらに出てゐた青服の連中はみんなぞろぞろ工場の方へ戻り始めた。大川も立ち上がつて、洋袴すわんぼんの尻こまの埃ごみを拂ひながら、「さあ、今日は今度の社長の挨拶があるつていふから、どんな奴だか面おもてを見てやらう。」

## 二

大川は工場の退ける汽笛が鳴ると、殆んど一番先きともいつて好い位早く外へ出て、門の傍にイみながら、ぞろぞろ引つ切りなしに續いて出て来る職工連の中から、一生懸命に平野の姿を探してゐた。大川は鑛物工で、平野は旋盤工だつたから、二人の仕事をしする工場は、まるで端はしと端はしといつてもいい位離れてゐた。

「如何したんだらう。ひどく遅いな。」

思はず口に出して出るほど、彼が苛々してゐるといふことは、その頬の肉が引つ釣るやうに顫ふるへてゐるのでも分つた。彼は見遁みぬすまいとして、ぞろぞろ出て来る人達の顔を一々目を睜みまるやうにして覗き込んだ。で、みんながもう殆んど歸り切つてしまつた時分に、つ

のつそり出て來た平野の顔を見ると、彼はほんとに心から怒つてゐるやうな調子で怒鳴

た。  
「何だい。何を愚圖ぐず々々してゐたんだ。おれはもうさきから君の出て來るのを待つてゐたんぢやないか。」



が、平野は何で大川が機嫌を悪くしてゐるか分らなかつたので、

「さうか。そりやあ失敬したよ。」

といったぎり、二人は肩を並べて歩き出した。

四月ももう未に近かつたが、五時の聲を聴くとそこには黄昏の色が、徂く春の果敢な  
さを見せて漂つてゐた。今黠いたばかりの灯の色も、入染んでゐるやうに潤んでゐて何處  
からか魚を焼くやうな臭ひが、潮風と一緒に流れて來た……

「おい、何處へ往くんのだ。」

二人は新佃のもう相生橋に近いところの駄菓子屋の二階を借りて住んでゐるのだが、大  
川は今日に限つてそつちの方へ曲らずにかへつて反對の方へ往かうとしたから、平野は如  
何したのかと思つて、かういつて訊いた。

「うん、ちよつと話があるんだ。それにはやつぱりいつものあの堤の上が好きからあすこ  
に往かう。」

「うん……。」

如何いふ話だか分らなかつたが、大川にかういはれると、平野も一緒に往かない譯には  
往かなかつた。それにいつも午休みに二人が話をする場所に極つてゐる防波堤は、もうそ  
こから一丁位しかなかつた。午後から少し風立つて來たので、防波堤を打つ浪の音はもう  
ここまでも聴こえて來てゐた。

二人は唯黙つて歩いてゐるばかりで、いつもの防波堤の上に来るまでお互ひに何ともい  
はなかつた。で、堤の上に登つて、そこに腰を下ろすと平野はさつきから聴きたいのを耐  
へてゐたやうに、促がすやうな調子でいつた。

「さあ、話して呉れ。何もかもすつかり打ち明けて話して呉れ。わざわざおれをここまで  
伴れて來て話をするやうな話だから、何か餘つ程のことだらうと思つて、實はおれはもう  
さつきから氣が氣ちやあなかつたんだ。」

「うん……。話さう。」



大川はさう歎息を吐くやうにいつて、遠く海面の方へ目を遣つたが、そこはもう夕闇に閉されてゐて、遙か彼方の陸の影は見えなかつたが、水路を示す潒標<sup>みはつくし</sup>だけは朧ろけながらも認められた。彼はぢつとその潒標の影を凝視めながら、

「實はおれはもうあの工場にはゐられないよ。」

「何だ。ゐられない……」平野はびつくりして訊き直した。「唯ゐられないだけぢやあ譯が分らないが……如何したんだ。何か工場のやり方に氣に入らないことでも起つたのか。それともまた誰かと喧嘩でもしたのか。」

「いや、何も氣に入らないこともないし、喧嘩をしたつて譯でもないんだ。が、おれはもう如何してもあの工場にはゐられないんだ。」

「如何してだい。おい、大川。早くそのゐられない譯を聽かして呉れよ。君がゐられないといひ出したのには、何か餘つ程止むを得ない譯があるんだらう。」

「うん、ある……大にあるんだ。」

「何だよ、早く聽かして呉れたつて好いぢやないか。」

と、大川は仄暗い夕闇の中を、透かすやうに平野の顔を見ながら、

「實は今度の社長だがね、おれは今日挨拶の時に顔を見てびつくりしてしまつたんだ。」

「うん、今度の社長か……何だか感じの悪いやつだな。それぢやあ何か……。今度の社長が氣に入らないつて譯なのか。」

「氣に入らない位なら好いが……。」

といつてから暫く間を置いた後で、急にきつとした調子になつて、

「平野。あの社長はおれの何に當ると思ふ。一度會つたきりでも顔はよく覚えてゐるし、名前だつて忘れやしねえ。あいつはおれの妹の亭主なんだ。」

「えつ……。君の妹の……。」

「妹のやつ。榮耀<sup>えいぎょう</sup>がしたさにあんな年の違ふ男のところへ嫁に行きやあがつたんだ。如何だ。平野。おれはこの工場にゐられると思ふか。」



「うん、ちよつとそりやあるられないな。」

二人はかなり長い間黙つてゐた。防波堤を打つ浪の音も寂しかったが、大川の心の中も寂しかった。

新しい社長といふのは、あの東海林だつたのである。

## 三

二人はかなり長い間頂垂れたまま黙り込んでゐたが、そのうち大川の方から、房州通ひか伊豆通ひか船の汽笛が聴こえて來たので、大川は不圖呼び覺まされたやうに顔を上げた。「ねえ、おい、平野。おれはさういふ譯で、明日からもうあの工場には出ないつもりだが、君は今みんなの人望を集めてゐて渾名にもしろ先生と云はれてゐる位なんだから、おれに關はずあすこゝにゐて、あの社長のやつが悪い事をしないやうに見張つてゐて呉れ。」

「うん、しかし……。君とはどんな事でも一緒にやらうつて、あんなに堅く約束をしたん

だからなあ。君がやめりやあ、おれもやめるよ。」

「しかし、君とおれとちやあ今度の場合は事情がまるで違ふんだからなあ。二人一時にやめてしまつたら、第一明日からの生活にも困るぢやないか。」

「うん、それもさうだけれど……。」

「それにあの東海林つて男は、見たところから我慾の塊り見たいなやつだが、實際如何も我々に對して酷いことをするらしいんだ。それだから君は如何してもあの工場に正義のためにも残つてゐて呉れなくちやあ困ると思ふよ。」

「さうか。あいつはそんなに醒い奴か。」

「正義の爲に」といふ言葉が、平野の耳に力強く響いたといふことは、さういふ言葉の調子でも分つた。

「うん、よくは知らないが、さういふ噂を聞いたことがあるんだ。」

「さうか。それぢやあうつかりあの工場はやめられないな。」



「だから君だけは残つてゐて呉れんといかんだ。そして今度の社長がどんなことをするか、よくその目で見張つてゐて呉れ。」

「うん、よし。さういふ譯なら君は明日から斷然あの工場に出るな。その代りおれが二人分働いてやる。おれは君のいふ通り正義のために残つてゐるやう。」

「うん、さうして呉れ、さうして呉れ。」

大川は思はず平野の手を取つて堅く握つた。二人は急に目の中が燃えるやうに熱くなるのを感じたが、しかし涙は零さなかつた。もう日はとつぷりと暮れてしまつて、潮濕りのした春の夜風が、しつとりと二人の頬を吹いた。

「ねえ、君。」暫くすると平野は顔を上げて、「君はそれでこれから如何するつもりなんだ。」

「これからか……。さうさな。やつぱり何處かの工場に出るより外仕方があるまい。」

「うん、しかし、まあ、あんまりあせらないが好いぜ。二人の食ふ位はおれが稼ぐだけで如何にかやつてゆけるだらうと思ふから……。」

「しかし、君一人働かせて、おれが遊んでゐるつて譯にも往かないからなあ。」

「何だい。水臭いことをいふなよ。まあ遊んでゐろ、遊んでゐろ、そのうち如何しても君が出なくつちやならないやうな幕が開くから……。」

「うん、まあ詳しいことは家へ歸つてから相談しやう。そろそろ往かうか。」

「うん……。」といつて立ち上がり懸けたが、不圖海の向ふを見て、「おや月が出かかつてゐるぞ。」

さういはれて大川も氣が付いて海の向ふを見ると、雪の裂目から月の光らしいものが、微かに漂ふやうにおほめてゐた。

「今夜は幾日位の月だらうな。」

大川は甘い春の夜の哀愁といったやうなものを感じながら平野に訊いた。

「さあ、五六日前満月だつから、もう大分缺けてゐるな。」

「さうか。しかし、静かだな、春の晩は……。」



と、不圖大川の胸には、お鳥のことが浮んで来た。二度目に病院に訪ねて往つた時は、もう退院をしてしまつた後で、何處へ往つたか訊いても往く先が分らなかつたが、その後あの女は如何してゐるだらう。

「達者でゐるだらうか、如何だらうか。若しこんな静かな晩にあの女とゐたら……。」

さう思ふと大川は、ひどくお鳥が戀しくなつて、ぢつと海に向ふの月魄を眺めながら、何時までも黙つて考へ込んでゐた。で、平野から促すやうに、

「おい、如何したんだ。早く往かうぢやないか。」

といはれて、やつと氣が付いて立ち上がったが、不圖向ふの方から堤の上を、甲高な聲で唄をうたひながらこつちの方へ近寄つて来る若い女の姿を見ると、今お鳥のことを考へてゐるだけに何となく胸を轟かせないではゐられなかつた。

あなたの家は川下よ、

わたしの家は川上よ、

ところ一里を隔つとも、

思ふところは同じだわ。

女のうたふ唄の聲は、遺瀨ななさうに春の夜の海の方へ流れて往つた……。

## 四

「あら、平野さん。如何したの。」

女は平野の姿を見ると、急に唄をうたふのをやめて、懐かしさうに近寄つて来た。見るとそれは午休みの時に大川が話した、少し白痴だといたれてゐる掛茶屋の娘のお梅だつた。「なあんだ。お梅ちゃんか……。馬鹿に好い聲だな。誰かに聴かせやうと思つて唄つてゐたんだらう。」

大川がさういつて冷かすと、お梅は眞面目な顔付で、

「ああ、さうよ。あたい平野さんに聴かせやうと思つてうたつてゐたの。」



「如何だい、平野。晝間おれがいつてるたのは嘘ぢやあなからう。」  
と、平野は怒つたやうな聲で、

「止せよ。くだらない。さあ、往かう。」

といつてさつさと堤を降り始めた。

「あら、平野さん。遁けなくつたつて好いぢやないの。」お梅もその後を追ひながら、「遁けやうつたつて遁がしやあしないわ。あたひ何處までも隨いて往くから……。」

平野は返事もせずすんすん歩いて往つたが、お梅は關はず後を追ひ懸けて往つたが、平野があんまり相手にしないので、諦めたやうに少し後れてやつて來る大川の傍へ來て訴へるやうに、

「ねえ、大川さん。あの人如何したの。怒つてるの。」

大川も戯弄からかふやうに笑ひながら、

「うん、怒つてるんだらう。謝あやまつておいでよ。」

「いやだあ。怒つてるんなら怖いもん……。」

さういつてお梅は尻込みした。で、大川は可愛さうになつて慰めるやうに話し懸けた。

「しかしお前さん、これから何處へ往くんだい。」

「あたひ……。あたひはね、これから手傳を頼まれて、新佃の御別莊に往くの、ひよつとしたらあたひそこの家にお奉公するかも知れないんだよ。そこの旦那は以前あたひを可愛がつて呉れたことがあつて、あたひの子供のお父つあんなの。」

大川の胸には燃えるやうな憤りの情がむらむらと起つた。

「だ……だ……誰だ、そいつは……。新佃の別莊つていふのは誰の別莊なんだ。」

「別莊の旦那の名前を訊くの。旦那の名前は東海林つていふの。」

「何……東海林……。」

さういふと同時に、體中が激しい憤りのためにぶるぶると顫へた。が、お梅はそんなことには氣が付かずに話しつづけた。



「そりやお立派なお別荘だよ。海の方に向つたところに西洋館があつて、廊下なんぞうつかりするとつるつると滑るの。あたい始めて往つた時に滑つて轉んでみんなに笑はれちまつた。ほんとにあんな耻かしいことはなかつたわ。」

大川はやつと憤りの情をぢつと押へ付けて、

「さうか。そんな別荘なのか。おりやあやつぱり新佃にゐるんだけど、そんな立派な別荘があることはちつとも知らなかつたよ。何かいあの兜町の<sup>かねま</sup>方の別荘の近所かい。」

「ああ、さうだよ。あの直ぐ傍だよ。」

月が出たと見えて、四邊が急に明るくなつて來た。月明りで見ると、少し白痴だといはれてゐる丈けに、何處か間の抜けたところはあつたが、それでもここらでは目に付く位の美しい縹緞<sup>きりぎりす</sup>で、目には無心の子供に見るやうな清らかなあどけなさが溢へられてゐた。

大川はその顔を見ると、一層この女がいぢらしくなつて、

「それでお前の子供は如何してゐるんだい。」

「あたいの子供……。子供はね、この間まで龜戸の方へ里つ子に遣つてあつたけれど、今度その別荘に來たお妾さんが世話をして遣つていつて引き取つて呉れたの。」

「ふうん、その別荘にはお妾さんがゐるのか。」

さういふと同時に大川は、何となく息窒<sup>いしづつ</sup>まるやうな胸苦しさが感じられた。

「ああ、これまでは旦那が時々來るだけだつたんけれど、この頃お妾さんがゐるやうになつたの。」

「で、そのお妾さんの名は何ていふんだ。」

「ええと……何でもお鳥さんとかいつたつけ。」

「何……お鳥だと……。」

大川が思はずさう大きな聲で叫んだので、お梅を避けるやうにして、七八間先きを歩いてゐた平野も、びつくりして立ち留まつて振り返つた。

「何だ、何だ。ええ、おい……。如何したんだ。」



「ううむ……。」

大川は唯呻くやうに唸つた。

地獄の火

「何だ、何だ。何を唸つてゐるんだ。」

平野から疊みかけるやうにかう訊かれると、大川も黙つてゐる譯には往かなかつた。

「うん、何だ。君に何時か話したらう。ほら淺草の例の鳩の家に酔つ拂つて飛び込んで来たつて女さ。」

「うん、何とか云つたな。お鳥さんて女か。如何したんだ、その女が……。」

「その女の居所がやつと見付かつたんだ。」

「さうか、何處にゐるんだ。」



さう訊かれると大川は、また激しい憤りを感じたから、

「うん、それが……何だ。今度あの工場を買つてあの会社の新しい社長になつた男ね……。」

「何もさう廻りくどくいはなくたつて分つてゐるよ。東海林だらう。」

「うん、あいつの別荘にゐるんださうだ。おれはあいつの別荘が新佃にあるつてことはちつとも知らなかつたんだよ。」

「さうか。」

平野は大川から詳しく話は聴かなかつたけれども、その時の話の様子で彼がその女をかなり深く思つてゐるといふことだけは了解されてゐたから、この場合何といつて好いか、ちよつと云ひ出す言葉に困つた。お梅は二人が何を話し合つてゐるか知らないやうな様子で、月の光に酔つたやうに「あなたの家は川下よ……。」といふさつきの唄をうたひながら、呑氣さうにぶらぶら歩いて往く……。

「それも今そのお梅さんの話に依ると、あいつの妾にされてゐるらしいんだ。」

大川はさういつてから、大事なことを話すのを忘れてゐたといふやうな顔付で、周章あやてて附け加へた。

「あのね、君。それからさつき誰かあの女に子をませたやつがあるつていつたらう。それもやつぱり東海林だつたんだよ。」

「さうか。さういふやつが偶たまにゐるから、資本家全體が悪く思はれるんだな。ようし、それだけでも、もう正義の敵だ。ひとつふたつ酷ひどく遣つ付けてやらう。」

「うん、遣つ付けて呉れ。正義の敵だ。何の用捨ようしゃもあるものかい。」

さういつてから暫く大川は黙つてゐるが、無理に苛立いらだつ胸を押へ付けてゐるやうな調子で獨り言のやうに、

「よをし、おれもお鳥の居所が分つたとなると、如何してもあの女をあの悪魔の手から救ひ出さなくつちやあならないぞ。」

もうこゝは新佃だつたが、青白い月明りで廣い往來のつづくかぎり、ずつと月島の方ま



で見渡された。静かな春の夜で浪の音までが眠さうに響いてゐたが、しかし大川の胸にも平野の胸にも、何となく落ち着かない寂しい不安が醸かされてゐた。唯お梅だけは、この籠かごろに夢見てゐるやうな春の夜を楽しんでゐるやうに、微かかながらも唄うたをうたふのを止めなかつた。が、とある四つ辻のところまで来ると、急に立ち留まつて二人の方を振り返つた。

「それぢやあ、あたいたつて来るわ。」

といつたままさつさと海岸の方へ往く横町を曲つて往つた。明るい月明りの中を、無心に唄をうたひながら遠ざかつてゆく、この哀れな美しい白痴の後姿を見送つてゐると、大川の目は何時か涙に潤んでゐた。

「可哀さうにあんな女に子供を生ませるなんて……。何てえ奴だらう。ああ、平野、如何だ。あいつを女房に貰つてやれ。少し白痴だといふけれど、ほんとに無邪気で可愛い女ぢやあないか。」

さういふ大川の言葉の調子が、ひどく眞面目まじめで熱心だつたので、平野はちよつと返事に

困つたやうに、唯まじまじと相手の顔を凝視めながら黙つてゐた。

「おい、何故返事をしないんだい。おれは眞面目で云つてゐるんだぜ。ええ、おい。何とか返事をしろよ。ほんとに如何だい、女房に貰つては……。」

「うん、ま、よく考へてからのことだ。大川。君は何だ、今晚は妙に苛々してゐるやうだな。」

「苛々もするし、癩かさにも觸るよ。如何だい。久しぶりで今夜は一杯やらうぢやないか。」

「うん、やつても好い。ひとつまた正義の爲に杯でも上げるかな。」

「好からう、好からう。飲むと極りやあ早い方が好い。その山やま一いちに飛び込まうぢやないか。」

「よをし……。」

丁度その時二人はもう、山やま一いちといふ暖簾のれんを下けた一軒の汚けならしい居酒屋の前に来てゐたので、平野はさう怒鳴るやうに叫ぶなり一足先きに飛び込んで往つた。



長方形の卓子の兩側には、縁臺のやうな腰掛を置いてあつて、もう五六人の客が好い心持さうにその卓子を圍んで酒を飲んでゐるが、平野と大川とが入つて往くと、そこに居合はせた客の中から、

「いよを、大統領と先生、如何したんだい、ここに來るなんて珍らしいぢやないか。」

と云つて懐しさうに聲を懸けたものがあつた。それは寅吉といつてやつぱり同じ工場に出てる老職工だつた。

## 二

「寅さん。好い機嫌だね。」

大川がさういつて言葉を懸けると、寅吉は舌舐めずりをしながら目を据えて、

「何だつて……大統領。ええ、おい、あつしが酔つてゐるのが、そんなに好い機嫌に見えますかね。笑談いつちやいけねえ。あつしは今夜はひどく機嫌を悪く酔つ拂つてゐるん

だ。ええ、おい、分つたかい。何故機嫌が悪いかつてことが……。ははは……。解るめえ、いくら大統領でも先生でも、こいつばかりは分るめえ。それがよ。あつしはいつもの地獄耳で、さつきふいと聴き込んで來たんだが、……あつし等は二三日うちに半分位酩酊されるつて話なんだぜ。」

「ほんとか。畜生……そんなことをしやがつたら……。」

平野は睨むやうな目付をしながら齒を堅く喰ひしばつた。

「それだからあつしは酩酊になる前祝ひに、今夜はかうして飲んでゐるのさ。」

諦めたやうにさう云つてゐる寅吉の顔にも、何處か寂しさが浮んでゐるのだ。大川はちつと憐むやうに見遣りながら、

「しかし、寅さん。安心しておるよ。おれ達二人で如何にかしてそんなことはさせないやうにするから……。おれ達はいつもいふ通り、資本家でも労働者でもどつちでも悪い方を遣つ付けるんだ。つまり正義の敵は、即ち我々の敵といふことになるんだ。」



「さうかね。あつしにはよく分らねえけれど、まあ、よろしくお頼み申しますよ。」

大川は點頭きながら氣が付いたやうに平野の方を向いて、

「おい、何か云つたかい。」

「うん、云つたよ。」

と云つてゐるところへ、酒の銚子や數の子や刺身を運んで來たので、二人は直ぐに飲み始めた。

「ああ、酒を飲むのは久しぶりだ。おれはもう酒はふつり禁めつちまはうと思つてゐたんだが、今日のやうなことがあると飲まずにやあるられないよ。」

大川がさういふと、寅吉は不圖聽耳を立ててゐたが體を乗り出すやうにして、

「何です、今日のやうなことつていふのは……。何かあつたんですかね。」

「成程……こいつは地獄耳だ。まあ、何でもない、くだらないことさ。」

大川はさう軽く寅吉に云つて置いてから、平野の方に向つて、

「ところで如何だい、さつきの話は……。」

が、平野はちよつとその間の意味が分らないやうな様子で訊き返した。

「何だか分らないな、さつきの話つていふのは……。」

「分らないは心細いな。何だよ。女房にしてやれつて話だよ。分つたらう。」

「うん、さうか。また君はひどく熱心に勧めるぢやあないか。」

「何だかおれはあの女が可愛さうで堪らないんだ。それだから如何かして早く幸福な日を送らせてやりたいと思つてさういふんだが、君は貰つてやる氣にはならないかね。」

「さうさなあ。ちよつとこいつは返事に困るよ。しかし、何だぜ。あの女は幸福な女とおれは思ふよ。おれには何だか白痴だとか狂人だとかいふものは、普通の人間よりも幸福なやうに思はれて仕方がないんだ。」

「そりやあ考へやうに依つては幸福だよ。」

「それだからおれはあの女よりも、まだ會つたことはないが、そのお鳥さんて女の方が不



「幸な女だと思ふんだよ。」

「そりやあんな不幸な女はありやあしないよ。身の上話もすつかり聞いたが、これまでにだつてするぶん不幸な生涯を送つて來たらしいんだ。それにこれから先きだつて、あのままにして置いたならば、ますます不幸の淵に沈んでゆくばかりだと思ふよ。」

大川の目に涙が微かに光つてゐるのを見ると、平野も何だか誘はれたやうに涙含まれた。「救つてやれ、救つてやれ。如何にかして救つてやれ。これも正義派のやる仕事のひとつだ。」

「うん、畜生……。救つてやるとも……。おれはきつと悪魔の手から救つてやる。まあ、兎に角今夜はひとつうんと飲まう。」

大川はさう云つてからぐつと一杯飲み乾してから平野に杯を差した。

「おい、ひとつ受けて呉れ。こいつは正義の杯だぞ。」

## 三

もう十一時を少し過ぎてゐたけれども、山一の店はだんだん賑やかになつてゆくばかりだつた。客はさつきの六七人で、顔觸れは變つてゐなかつたけれども、みんなの様子はもうすつかり變つてしまつてゐた。或ものは皿を敲いて安來節をうたへば、或ものは口三味線で義太夫の佐和利を唸つた。卓子の上には徳利の數がかなり多く並んで、酒臭い空氣が薄暗い電燈の下で渦巻いてゐた。

「はははは……。面白れえ、面白れえ、おい、寅さんもう一度今の唄をうたつて聽かせろよ、お前は年に似合はず好い聲だな。」

さう大川が煽てるやうにいふと、寅吉はとろんとした目を閉つて、自分で自分の聲に聞き惚れてゐるやうな顔付でうたひ出した。

「佐渡へ……。佐渡へ……。と草木は靡く……。佐渡はるよいか……。住みよいか……。」



「はははは……。何だい、寅さん……。それは。」

もうかなり酔つてゐる平野は、ぢつと目を閉つて聽いてゐるが、その哀調が身に染みたやうに、急いで前の杯を取り上げながら訊いた。

「うん、これか……。これは佐渡節よ。おいらは佐渡の生れなんだ。」

「さうか……。酒に酔つてあんな唄を聽くと堪らない。」大川も投げるやうに云つて目を閉つた。

平野と大川と二人だけは、何故かその唄を聽いてから、すつかり黙り込んでしまつて、唯酒ばかり呷つてゐるが、他の人達はやつぱり皿を敲いたり手拍子を打つたりして、いろんな俗謡をうたひつゞけてゐた。瘦せた黒い毛の宿無し犬が、のつそり中に入つて來たが、この騒ぎに脅えたやうに卓子の蔭に隠れて、そのままそこへ寝そべつてしまつた。

と、暫時すると、それまで項垂れたまま黙つてぢつと考へ込んでゐた大川は、他人に聽かれるのを憚るやうに、低い聲で平野に話し懸けた。

「おい、おれはさつきからいろ／＼救ひ出す手段を考へてゐたんだが……。如何もこいつは荒療治だな。」

「荒療治……。」平野はぎよつとした顔付で訊き返した。「荒療治つていふと……。あの東海林つてやつを殺つ付けるのか。」

「うん……。おれはもう何だか……。かう……。胸が煮えくり返るやうな氣がしてならないんだ。」

大川の顔を見ると、ほんとに殺しかねないやうな、蒼ざめた憤りの色がもの凄まじく現はれてゐたので、平野はぎよつとしながらも強くそれを否定するやうに云つた。

「そんなことをして如何するんだ。いかん、いかん、斷じていかんよ。そりやあ殺しても飽き足りないやうな奴だけれども、そんな直接行動に出ることは、いやしくも正義を眞つ向に揮り翳して進まうとしてゐる、我々の取るべき手段ぢやない。それよりも、君。機會といふものがあるよ。待つてゐたまへ。救ひ出す機會がきつと來るから……。」



と、大川は怒つたやうな調子で、

「おれは機會なんぞをべんべんと待つてはゐられないんだ。」

「そりやあさう思ふのも無理はないが……、しかしその機會は二三日うちにはきつと來るよ。いや、ひよつとしたら今夜のうちにも來るかも知れない。」

「來るもんか。仕方がない。酒だ酒だ……。」

酒臭い爛れた空氣の渦卷はだんく酔つた人達の心を狂暴にして往つた。もうそこには唄もなければ、言葉もなかつた。唯そこには意味をなさない音と響とが、狂人のやうに踊り狂つてゐるだけだつた……。卓子の下に寝そべつてゐる、黒毛の瘦せた犬だけがひとり覺めて、この濁つた空氣の中で、懶さうに喘いでゐた。

と、この時誰だか表の往來を、

「火事だぞう……。」

と叫びながら魔もののやうに走り過ぎて往つたものがあつたかと思ふと、後はまた急に

靜かになつた。店の中もその聲が聴こえると同時にしんとしてしまつた。暫くの間は誰も口を利くものがなかつた。

がやがやいふ人聲が風につれてひとしきり何處からか聴こえて來たかと思ふと、半鐘が急にけたましく鳴り始めた。

大川は火事といふ聲を聴くと同時に、或る豫感が胸の中を掠めるやうに通り過ぎて往つた。

「ひよつとしたら東海林の別莊ぢやないだらうか。」

さう思ふと、何だかこゝに愚圖々々してゐられないやうな氣がして平野を促がすやうにして勘定を拂つて外へ出たが、見ると今燃え上がったばかりの火の手はさつきお梅が曲つて往つた横町を、丁度海岸に突き當つたところ邊から立ち騰つてゐた。

月はもう何時の間にか雲に蔽はれてしまつてゐて、暗い夜空には火焰の影がもの凄まじく映つた。火の焼け擴がつてゆく音がぱちくぱちくとこゝまでも聴こえて來た。



「たしかにさうだ。」

大川はさう思ふともう夢中になつて、友達も後に振り棄てたまゝ燃え上がる火の手を<sup>ひ</sup>目<sup>め</sup>鬼<sup>おに</sup>けて驅け出して往つた……。

## 四

火事は果して東海林の別荘から出たものだつた。

大川の驅け着けた時には、火はもう日本家の方を<sup>な</sup>管<sup>くだ</sup>め盡くして西洋館の方に移りかけてゐたが、今やつと蒸汽<sup>ボンプ</sup>唧筒が來たところで近所の人達はかへつて焼けるのを痛快そうに眺めてゐるばかりだつた。

「鬼東海林の家が焼けるんだ。」「へつ、焦熱地獄たあよく云つたよ。」「放火かも知れないぞ。」

そんな囁きが見物してゐる群衆の口を洩れて大川の耳にも聽こえて來た……。

が大川はお鳥の身の上のことを考へると、到底黙つて見て居ることは出来なかつた。彼は力一杯押し退けるやうにして、ぐんぐん前へ出て往つたが、もう三四十間手前のところまで近付へと、海の方から吹いて來る風に煽られた火勢が、かつと顔も手足も燃えるかと思はれるほど熱く感じられた。

「危いぞ。もつとあつちへ往つて……もつとあつちへ往つて……。」

さういふ聲が聽こえると同時に、彼は誰かに押し留められたが、その途端に何の氣なしに、不圖西洋館の二階の方を見上げるとその窓から首を出して、しきりに<sup>たけ</sup>助<sup>すけ</sup>を呼んでゐる女があるのが目に留まつた。

「あつ、あんなところに女がある。」

彼が思はずかう呼ぶと、やつとみんなそれに氣が付いたものと見えて、みんな口々に叫び出した。

「ああ、女だ、女だ。」「ああ、鬼東海林の妾だ。」



「可哀さうに……早く誰か往つて助けてやれ。」

東海林の妾と云ふ言葉を聴くと、大川はもう一度確めるやうに、二階の窓を見上げたが、めらめらと燃え上がる焔の光に照らし出されたところを見ると、それはまさしくお鳥だ。

「あつ、お鳥だ、お鳥だ、お鳥があすこで焼け死なうとしてゐる。」

さう思ふと彼はもう夢中だつた。「危い。何處へ往くんのだ。」

と云つて抱き留めやうとする腕を振り離して、彼はまるで阿修羅あしゅらのやうな勢で西洋館の入口目蒐けて飛んで行つたが、もう階下は一面に火が廻つてゐて、扉を開けると同時に煙が濛々と彼の體を包んでしまつた。

「畜生……。如何ともなれ。」

彼は心の中でかう棄鉢な叫び聲を上げながら、煙の下をはふやうにやつと、階子段を上がつて往つて、女が首を出して助けを呼んでゐた部屋と思はれるところの扉を開けた。そこももう煙が一杯漲つてゐて、ちよつと覗いただけでは、中に誰がゐるか分らなかつた。

「助けてえ……助けてえ……。」

と云ふ悲鳴ひびきの聲が窓の方から聴こえたので、關はず煙の中をその聲のする方へ突き進んで往つた……。

「助けてえ……助けてえ……。」

その聲はまさしくお鳥の聲だと思ふと、大川はひとりでに體中が、ぶるぶる電いたづまに撃たれたやうに顫へた。で、もう何とも云へない涙も出ないやうな喜びを以て夢中になつて女の傍へ駆け寄つて往つて、堅くその體を抱き緊めながら叫んだ。

「お鳥さん……僕だ……僕だ……生命がけで君を救ひ出しに來たのだ……さあ……早く……早く出やう……。」

彼はお鳥の體を擁へるやうにして階子段の方へ急いで往つたが、もうそこにも火が廻つてゐて、如何することも出来なかつた。

「よをし……それぢやあ窓から飛び降りるより外任方がない。」



さう彼が決心した時には、海の風に吹き煽られた火は、もうどんどん二階の方までも燃え上がつて來てゐて、床の間からも壁の隙からも、ちろちろ焔が盛に吐き始めてゐた。で、彼はお鳥を肩に背負つたまま煙に噎せて息が窒まりさうになりながらも、その焔の間を潜つて、また窓の方に近付いて往つた。

「危いぞ……。」「氣を付けろ……。」

さう云ふ叫び聲を夢のやうに聞きながら、大川はお鳥を背負つたまま、飛び降りやうと窓に足を懸けると、その途端に二階の床が燃え墜ちたと見えて、渦を卷いた焔が煙と一緒に凄まじい勢で吹き付けて來た……。

「あつ、しまつた。」

體が宙に浮いたと思ふと、何かに力一杯敲き付けられたやうな感じがしたばかりで、彼はもう何にも分らなかつた……。

## 能島の手紙

一

「いよいよ世界終焉の日がやつて來たね。」

「うん、いよく來た。善も悪も、清きものも汚れたるものも、ともに一緒に亡びるんだ。」

「さうだ。みんな一緒に亡びるんだ。東海林も、お鳥も、君も、僕も……。」

「あつ、何だか硫黄臭くなつて來たぞ。」

「あ、見る。あすこの山から火を噴き始めた。」

平野がさう云つて指差した方を見ると、そこにはまるで悪魔が躍り狂つてゐるやうな形をした山があつて、その嶺からは烽火のやうに、赤い血のやうな色をした火の柱が一筋高



く立ち騰つてゐて、焔は夜の空に浮んでゐる黒い蝙蝠のやうな形の雪の翼と思はれる邊を焔々と焦がしてゐた。そしてこれまでは暗くて分らなかつたが、火を噴き始めて明るくなつたところで見ると、その山の麓のところには、押し潰されたやうに歪んだ恰好をした工場が、幾重にも幾重にも重なつて立ち列なつてゐて、そこには無数の煙突が林のやうに並んで突つ立つてゐた。

「あゝ、いよゝ終焉だ。見たまへ、煙突から煙が出なくなつた。」

「おや、機械の響も止まつたやうだな。」

「うん、もう何にも聴こえない。資本家も労働者も、富めるものも貧しきものも、一緒になる時がいよゝ來たんだ。」

「あつ、如何したんだ。山が急に鳴り始めたぞ。」

「あゝ、如何したら好いだらう。地面が地震のやうに揺れ始めた。」

それは唯地面が揺れてゐるばかりではなかつた。山も、雪も、火の柱も、工場も、無数

の煙突も、みんな一齊に、大きくぐらぐらと動いてゐた。そしてその動くのがだんぐら激しくなつて來るにつれて、山の巔から噴き上げてゐる火の勢もだんぐら強くなつて來ると同時に無数の猛獸が吼え立てゝゐるやうに山鳴の響も、急に高くごおつと凄まじい音を立て始めた。と、間もなく工場の丁度中心の邊に、ぴかりと赤いものが閃いたかと思ふと百雷の一時に落ちるやうな響が聴こえて、山も、雪も、火の柱も、工場も、無数の煙突も、何時の間にかもう虚空遙かに吹き飛ばされてしまつてゐた……

「あつ、しまつた。」

體が宙に浮いたかと思ふと、何かに力一杯敲き付けられたやうな感じがして、大川は不圖氣が付いて目を開けた。何處だか分らないが、灰色に汚れた壁の狭い部屋で、彼はこの部屋の眞中に置いてある、寢臺の上に寢かされてゐるのだが、何だか體中が燃えるやうに火照つて、脚には疼くやうな激しい痛みさへ感じられた。薄暗い十燭位の電燈の光も、堪らなく彼の胸を寂しくした。



「あゝ、おれは夢を見てるんだ。」

彼は不圖さう気が付くと同時に、急に咽喉が渴かわいて堪らなくなつた。で、誰か呼ぼうと思つたけれども、聲が思ふやうに出ないので、何だか犠もどか牲しくなつて起き上がらうとする、はつと電に撃たれたやうな痛みが、脚から背筋へかけて貫くやうに走つた。

「あ痛つ……。」

思はず聲を立てゝかう云ふと、その聲を聞き付けて、

「あゝ、やつと気が付いたな。」

といひながら、壁際の椅子から立ち上がつて、彼の寢臺の傍へ近付いて来たものがあつたが、心配さうに差し覗いた顔を見ると、それは今夢の中にまで一緒にゐた平野だつた。

「水……水を呉れ……。」

微かな聲でかういふと、平野はちよつと黙頭もくずいてから、寢臺の裾の方にゐるらしい看護婦の方を向いて、

「濟みませんが水を持つて来て下さい。」

と云つたが、直ぐにまた心配さうに大川の顔を覗き込みながら、

「如何だい。苦しいかい。」

と友情に満ちた聲で訊いた。

大川は微かに首を振つたが、事實は可なり苦しかつたので、その儘またちつと目を閉つた。と、彼の胸には、こゝが病院であることや、自分が如何してこゝに来るやうになつたかと云ふことなどが、だんくはつきり分つて来た……。それと同時に彼の胸には、お鳥が助かつたか如何かと云ふことが、妙に心許なく氣懸かりなやうに感ぜられて来た……。

「果して自分は、お鳥を救ひ出すことが出来ただらうか。」

思ひ切つて訊いて見やうと思つて、不圖目を開けて平野の顔をぢつと見詰めたが、心配さうに覗き込んでゐるその顔を見ると、そんなことを訊くことも何となく躊躇ちゆうちゆされた。



お鳥が背中に火傷をして、彼の病室の隣りに入院してゐると云ふことを大川が知つたのは、それから二三日してからだつた。

「しかしその火傷だつて、一週間もすれば退院が出来るつて云ふんだから安心したまへ。實は早く君に知らせやうと思つてゐたんだが、院長がまだ知らせてはいけないと云ふものだから、つい今日まで黙つてゐたんだ。」

平野がかう詫びるやうに云ふのを聴くと、大川はほつと安堵の吐息を吐かれた。その日は快く晴れた日で、彼の體の疼くやうな痛みも、もう餘程薄らいでゐた。病院は築地にあつたので、開け放した窓からは、潮の匂を含んだ風が爽やかに吹き込んで來た。それに昨日までずっと引き續いて三十七八度のところを上下してゐた熱も、今朝からはもう三十七度臺に下つて、話をする位の元氣は出て來てゐた。

「さうか。それぢやあ僕はやつぱりあの女を救ひ出すことが出來たんだね。」

「うん全く君一人の力で救ひ出したんだよ。それはあの女も涙を流して感謝してゐたよ。」

「何も感謝されることもないが……しかし僕は嬉しいよ。ほんとにこんな嬉しいことは始めてだよ。」

大川は目に涙を一杯浮べながら、ぢつと平野の顔を見詰めた。

「うん、嬉しいだらう、嬉しいだらう。しかしまあ……君の體が元通りになつて呉れりやあ好いんだがなあ……。」

平野の目に光つてゐる涙は、喜びとも悲しみとも、どつちともつかない涙だつた。

「なあに、僕の體なんて如何なつたつて好いよ。昨日院長が云つた言葉で、片方の脚はもう駄目なものだと諦めてゐる。」

「うん、しかしまだ分らないよ。君のやうに全然絶望してしまはなくつても好いと思つてゐるがね。」



「いや、駄目だよ。しかし駄目でも何でも關はない。脚の一本如何なつたつて好いさ。」  
さう云はれると平野は、何だか急に寂しいやうな心持がして、何とも云ふことが出来ずに口を噤んだ。と、丁度正午だと見えて大川を越して、月島の方の工場の汽笛の音が、懶い響を傳へて來た……。

「あゝ、午だよ。いつも君とあの防波堤の上で話をする時間だ。」

不圖その汽笛の音を聞き付けた大川は、その響を懐しむものゝやうに云つた。

「うん、もうあそこで君と話をすることも出来ないなあ。」平野はさういつてから不圖氣が付いたやうに「あゝ、君はまだ知らないだらう、東海林のことは……。」

東海林と聽いて大川は、寢ながらもきつと平野の顔を見上げた。

「なに……東海林……。あいつが如何かしたのかい。」

「うん……あいつは何だよ。この間の火事でやつぱりひどい怪我をしたんださうだよ。」

「ええ……ひどい怪我を……。そいつはちつとも知らなかつたな。如何してそんなひどい

怪我をしたんだ。」

「何でもあの晩はあの工場を買つて社長になつた祝ひに、あの別荘に客を招んで、大分先生酔つ拂つちまつたらしいんだね。」

ちよつと言葉を途切らすと、大川は先きを促がすやうに、

「うん、それで……それから如何したんだ。」

「それでもう正體なく酔つ拂つて、丁度寢入端にあの火事だつたんだらう。何でも寢室は西洋館の二階だつて云ふから、君がお鳥さんを助けにあそこに飛び込んで往つた時分には奴さん火が廻つて來たのも知らずに、ぐつすり寢込んでるんだらうと思ふよ。」

「可哀さうに……到頭あいつも地獄の火に焼かれたのか……。」

大川は悵然として目を閉つた。如何に憎むべき男だとは云つても、さう云ふひどい怪我をしたと云ふことを聴くと、悲しまずにはゐられなかつた。が、暫くすると不圖また何か思ひ出したやうに目を開けた。



「あゝ、それからあの晩あすこに手傳ひに往つてゐたお梅は一體如何したらう。」

「うん、あの女か。あの女は無事だったよ。運が好いつて云ふのか何て云ふのか、お鳥さんに預けてあつた子供を、今晚だけ自分が抱いて寝るんだつて、伴れて歸つた後であの火事だつたんださうだ。」

「さうか……。母子とも無事だったのか。」

「今隣の部屋に子供を伴れて、お鳥さんの見舞に來てゐるよ。」さう云つてからちよつと云ひ難さうに「ねえ、君。みんなあの女を白痴だつて云ふが、如何もさつきちよつと話をして見たところでは、そんなに白痴ぢやあないらしいぢやないか。僕はあの女がちよつと好きになつたよ。」

その言葉を聴くと大川の蒼ざめた頬には、その時始めて温かい微笑が浮んだ。

## 三

お鳥はすつかり快くなつてからも、やつぱり病院に留まつてゐて、心から大川の看護に手を盡くした。お鳥の傷は髪を少し焼いたのと、背中に火傷をした位のものだつたから、癒つてしまへば元の通りのお鳥だった。それに近頃では胸の方の病氣も大分快いし、毎日化粧をすることだけが仕事のやうな日ばかり送つてゐたので、最初酔つ拂つて「鳩の家」に飛び込んで來た時から見ると、今はもうまるで見違へるほど美しくなつてゐた。

が、お鳥に引き代つて大川の傷は、最初思つてゐたよりも餘程重いと云ふことは、二三日してから院長がそつと平野に囁いた言葉で分つた。火傷も肩だの手だの足だの方々にしてゐるがそれよりも醫者の眉を擧めさせたのは、墜ちる時に地面で強く打つために挫折した兩脚が、果してうまく元通りになるか如何かと云ふことだつた。が、時日が経つにつれて、それが片脚だけは、手術の結果元通りになるけれども、片脚は到底絶望だと云ふことが分つて來た……。

お鳥は自分を救つて呉れたために、大川がこんな不具者になるかと思ふと、戀以上深い



神に對するやうな心からの感謝の念が感じられて、自分がすっかり快くなつてからは、毎日殆んど大川の寢臺の傍を離れないで看護してゐた。そして二人の間には、もう何時の間にか楽しい戀の囁きが取り交はされてゐた。平野も毎日一度は必ず見舞にやつて來たが、彼とお梅との間にも、もう二人と同じやうな關係が生じてゐて、殆んど夫婦と云つても好いやうな生活が始められてゐるのだつた。

大川がお鳥の口からその話を聞いたのは、彼がもう直き退院することが出來ると云ふ、松葉杖を突いてならば、廊下位は歩けるやうになつてからだつた。その日は大川は寢臺の上に腰を懸けて、お鳥と二人でいろ／＼の話をしてゐたが、そのうちお鳥は不圖思ひ出したやうに云つた。

「あのね、あなたまだ知らないでせう。平野さんとお梅さんとのことを……。」

大川は不圖豫感されたけれども、まるで知らないやうな様子で、

「何だい。何かあつたのかい。」

「えゝ、あつたどころぢやないわ。もう二人はすっかり夫婦氣取なの。」

「さうか。そんな仲になつてゐるのか。」

さう云ひながらも大川は思はず微笑ほほえまれた。

「えゝ、そりや可笑しいんですよ。何しろお梅さんはあんな人でせう。それだからあたしを捉へて、今日は平野さんがこんなことを云つたとか、明日は二人で何處へ往くんとか、そんなことを何でも隠さずにいつてしまふの。中にはあたしも可笑しくつて可笑しくつて、噴き出しさうになることもあるんですよ。」

「さうか。そいつは面白いな。」

「えゝ、ほんとに面白いの。」

さういひながら二人は顔を見合せて、幸福な微笑を取り交はした。

「それですからね、今度平野さんが來たら冷かひやしておやんなさい。あの人まだあなたに何ともいはないんでせう。」



「あゝ、何ともいはいよ。」

といつたが、不圖何を思ひ出したか急に顔を曇らして、

「何時かつから聽かう聽かうと思つてゐたんだが、一體こゝの病院の費用なんぞは如何なつてゐるんだらう。」

「えゝ、それはちやんともう拂つてありますから御安心なさい。」

お鳥はさう云つたものゝ、手術料やら看護婦へやる金など加へると、かなりな額なにかに上つてゐて、それがまだ三分の一しか支拂はれてゐないことを思ふと、ちよつと心が暗くなるやうな氣がした。

大川もそれを感じたらしく、別にものを云はなかつたが、ふつと口を噤んで目を閉つた。そして厭きましい幾分かの時が過ぎた。

と丁度そこへ、扉ドアを外から敲ノックする音が聽こえて、一人の看護婦が入つて來た。

「あの、大川さん。御面會の方なんですが……」

出された名刺を受取つて見ると、それには「澁谷安三」としてあるぎり何とも書いてなく、ちよつと大川には誰だか思ひ出すことが出来なかつた。

「澁谷安三と……聽いたやうな名前だけれど思ひ出せないな。どんな人です。」

「えゝ、もう六十位の瘦せたお爺さんですわ。」

「瘦せたお爺さん……。」

「えゝ、何だか額のところにかう創痕きずあとがあつて……。」

その言葉で大川には、直ぐにそれが「不死身の安」であるといふことが分つた。不死身の安……憎むべき森が復讐の手先となつて、父の隆藏が持つてゐた鑛山ばなを滅つぶしたのも彼だ。しかしその後森に反抗して、その復讐の計畫を悉く隆藏の子の眞吉に打明けたばかりか、その前で悔恨の涙を流したのも彼だ。そしてそれよりは眞吉のために命懸けといつてもいゝ位の親切を盡して呉れたのも彼だ。

「あゝ、分りましたよ。どうぞこゝへ通して下さい。」



大川はさういつてから、ちつと待ち構へてゐるやうに戸口の方を見詰めた。

## 四

「やあ、こりやあ如何も……。さうやつて腰を懸けてゐられるやうぢやあ、大分もう快うがすね。」

さういひながら入つて來た安の顔を見て、大川が先づ驚いたのは、昔のやうな嶮しさがすつかり拭はれたやうに失くなつてゐるとだつた。「安も大分年を老つたな」と心の中で思ひながら、

「やあ暫く……。如何してゐるね、近頃は……。」

「いや、もう私もすつかり變つて、今ぢあ百姓をしてゐますよ。」

「百姓を……。」

不死身の安が百姓になつたといふことは、大川には殆んど信じられないやうな話だつた。

「はゝゝゝ……。いや實はね、私も最初から百姓をするつもりぢやなかつたんだが……。し  
かしかうなつたのも、みんなあなたの爲なんですぜ。」

「おれの爲に……。分らねえな。如何いふんだい。えゝ安さん。」

「いや、實はね、この正月ももう末でしたかな。もう鑛山にゐるのも厭になつて、東京に  
往つたら何か職位あるだらうと思つてあなたを頼りにふらつとこつちに出て來たもんなん  
です。それで何時だかあなたに、貰つた葉書のところへ訪ねて往つたら……。如何もひでえ  
ところにあるもんですな。中々分らなくつて弱りましたぜ。みんな訊いて見ると耶蘇だつ  
ていふんでせう。いゝや、そんなことあねえつていつたんですが、まあ、それでもやつと  
訪ね當て、往つて見るとがっかりしましたね。もうその家は空家なんです。」

「空家……。能島先生は如何したんだらう。」

「まあ、お待ちなさい。それで差配に往つて聽くと、大川さんて人は知らないが能島つて  
人は昨日静岡の方へ往くといつて引き拂つたといふぢやありませんか。それぢやああなた



も一緒だらうと思つて、用があつたら知らせて呉れといつて、静岡のところが書き残してあつたのを寫して、また静岡まで訪ねて往くと、能島さんはゐたけれどもあなたはゐない。手紙を残したまゝ、何處かへ往つてしまつたといふ譯なんでせう。私は全くあんなにがつかりしたことはありませんね。如何しやうかと思ひましたよ。」

「さうか……。能島先生は静岡へ歸つちまつたのか。静岡へ歸つて先生何をしてゐるんだね。」

静岡へ歸つたと聴くと、大川は何だか自分があすこを出たのが動機となつてゐるやうな氣がして、胸を壓されるやうな心持で訊いた。

「いや、先生面白いことを始めてゐますよ。静岡から十里ばかり入つたところに、平和村つていふのを始めてゐるんです。」

といつから、氣が附いたやうに慌てゝ懐から一通の手紙を出して、

「あゝ、すっかり忘れてゐましたが、この手紙を能島さんから頼まれて來ました。」

「手紙をおれに……。」

大川は自分のやうな叛逆者に——彼の叛いて唯一通の置手紙をして去つた者に、たとへこの中の文句は如何であるにもせよ、かうして手紙を寄越して呉れる能島の優しい心持に感激しないではゐられなかつた。彼は微かに目を潤うるませながら、

「それぢやあ安さん、お前さんは能島さんから手紙を頼まれて、わざわざおれのところやつて來たのか。」

「えゝ、さうですよ。是非この手紙を持つて見舞に往つて來いと言ふことだつたのです。」

「さうか……。しかしよくおれがこの病院へ入つてゐるといふことが分つたね。」

「だつて新聞に出てゐたんぢやありませんか。」

「新聞に……。」

といつてから、さつきから黙つて隅の方で茶を出したり何かするだけで、ちつと二人の話を聽いてゐたお鳥の方を向いて、



「おい、新聞に何か出てきたのかい。」と訊いた。

「ええ、出てきましたわ。」

「さうか。それで分つたのか。」

といひながら、能島の手紙をちつと見てゐたが、やがて思ひ切つて封を切つた。手紙には、唯簡單に「君と別れてからもう半年になるが、君のことは一日も忘れない。僕は急に都會が厭になつて、田舎に歸つて平和村といふものを始めた。武者小路君が日向に作つたやうなものだが、僕には武者小路君のやうな人格がないから、仕事をするのにも非常な努力を要する。しかしその努力は楽しい努力だ。聽けば君は大怪我をしたさうだが、癒つたら僕の村にやつて來ないか。きつと村の人達も君の來るのを歓迎するだらう」といふやうな意味が書いてあるだけだつたが、しかし讀んでゐるうちに、その文字の間から滲み出して來る愛の力は、深くく大川の心に染み込んだ。

「能島先生。どうぞこの叛逆者を許して下さい。往きます。きつと往きます。そしてまた

あなたと一緒に働かせて貰ひます。」

大川は心の中で詫びるやうにかう叫んだが、そのうち大粒の熱い涙が、火傷の痕の残つた醜い頬を傳つて、ほたくと手紙の上に落ちはじめた。



## 鐘が鳴る

夏が来た。天にも地にも光が漲り、野にも山にも林にも畑にも自然の力が満ち溢れる威ある姿の夏がまたこの世に循つて来た。

静岡の市からかなり奥に入つたところに、能島が今度新たに始めた「希望の村」と云ふのは大體は「新しき村」と云つたやうなものだつたけれども、そこには若い女達のために製糸工場や紡績工場などがあつたから、單調な平和な生活の中に幾分華やかな色彩が點ぜられてゐた。

村が出来てからまだやつと半年位にしかならなかつたけれども、毎日一人や二人は話を

聽いて村の人にならして呉れと云つて来るものがある位で、もう何時の間にか豫定の人數を超えてしまつてゐた。

大川は退院をすると直ぐに、松葉杖を突きながらお鳥を伴れて、不死身の安の案内で、この村にやつて来て久しぶりで懐かしい能島に會つた。そしてまた一緒に仕事をしやうといふことを能島に誓つた後で、

「やつぱり先生の云つてをられた通り、すべて愛から出發しなければ駄目ですよ。僕にはやつと今になつて先生の心持が分つたやうな氣がします。」

と云つて詫げるやうに首を垂れた。

かうして大川はこの新しい「希望の村」の村民の一人として働くことになつたのだが、まだこの外にも能島が新しい村を始めたといふ噂を聽いて集つて来るものの中には、かなりいろ／＼の人があつた。例の漂泊の畫家の北田胡沙雄は殆んど最初の村民だつたし、その友達であるところの東谷狂花も、その後帝劇の女優に失戀すると、急に東京が厭になつ



たと云つて、やつぱりこの村に飛び込んで来た。それに大川が来ると間もなく平野もその後を追ふやうにして、お梅を伴れてやつて来たから、大川としても頼もしい兄弟を得たやうなものであつた。

希望の光に照らされながら、自ら働き自ら糧を得る村の生活は楽しかつた。そこには平和があるばかりで、醜い争ひなどは絶えてなかつた。朝五時に起床を知らせる鐘が鳴ると、みんな起きて村を貫いて流れてゐる、川岸に往つて顔を洗つた。やつと夜が明けたばかりの夏の朝の美しい空を仰ぎながら、冷たい露を踏んで歸つて来ると、間もなくまた鐘が鳴つて村の真ん中にある広い食堂で朝の楽しい食事が始まる。そして次ぎの鐘が鳴るのを合圖に、畑に出るものは鍬や鋤を持ち、林に往くものは鋸や斧を携へて、それぞれ割り當てられた仕事をしに出かけてゆく。女達もやつぱりこの鐘を合圖に、村はづれにある工場をさして急いでゆく。村に住んでゐる人で、何にもしないでゐるのは病人位のもので、働かず暮らしてゐるものは一人もない。男も女もみんなそれぞれその日その日の營みにいそ

しんでゐる。

午が来る。食事係のものは握飯を畑や林や工場に運んで往つてやる。三時のお八つの時刻が来る。やつぱり當番のものは、芋の蒸かしたのだとか團子だとかいふやうなものを、みんなのところ運んで往つてやる。そのうち五時の仕事を止める時刻が来る。みんなは歸り支度を始める。そしてさういふ時には、きつと鐘の音が先づ朗らかに村中に鳴り渡るのである。

「鐘が鳴つたぞ。もう午飯を持つて来て呉れるだらう。」

「鐘が鳴つたぞ。もうお八つだ。」

「鐘が鳴つたぞ。今日はもうこれだけにしとくか。」

鐘が鳴る度にさう思ひながら畑を耕してゐる人達も、林を伐り開いてゐる人達も、工場に働いてゐる人達も、みんなそれぞれいろんなことを考へながら鐘の音のする方へ振り返つて見る……。そこには食堂の白い壁が見えて、その傍に白いベンキの櫓があつた。鐘は



その上に吊されてある。そしてその鐘の音も霞むかとはかりに、陽炎のやうな白いきれが、きら／＼と立ちのほつてゐて、何處からか雪雀の囀る聲が聴こえて来る長閑けさ——村の人達はかうして平和な一日を過ごしてゆく。

隻脚ひとあしを失つて働くことの出来ない大川が、この村に来てからの仕事は、毎日定められた時刻が来る毎に、この鐘を打ち鳴らすことであつた。

## 二

トルストイの誕生を祝ふといふやうな意味で、八月二十八日をこの村の祝日にして、平和祭といふものをやるといふことに相談が極まつたのは、もうその月に入つてからのことだつた。

兎に角この村が始まつてから最初の催しだと云ふので、村の人達はみんな熱心にいろいろな計畫をしてゐた。そのうち餘興委員の手で發表された番組プログラムを見るに、その中心には「カ

チュートシヤダンス」だの「希望行列」などと云ふやうなものがあつて、いろいろ奇抜な趣向が凝らされてゐるらしかつた。倶楽部の前の黑板に、この番組が白く書き出されると、これから毎日仕事の往き歸りにはこの前に立つて、さまざまの噂をし合つては、みんなこの日の来るのを楽しみにしてゐた。そしてそのうちその祭りの當日となつた。

その日は煙火はなびを揚げるやら、樂隊が来るやら、大きな縁門エドモが出来るやら、村中は朝からまるで引つ繰り返るやうな騒ぎで、午前には倶楽部の廣間の正面にトルストイの寫眞を飾つた壇を拵らへて、そこでもよつとした式のやうなものをやつたが、それが濟むといつてもはテニスコートにしてある空地に張つた大きな天幕の下で、みんなこの村で出来たもので造つた御馳走があつた。そしていよいよ午後になると、鐘が朗らかに鳴り渡るのを合圖に、番組に従つて餘興が始められた。

「徒歩競走」や「スプウンレース」や「障害物競走」や「載籠レース」や「二人三脚」や「巾飛」や、いろいろそんな競技があつて、村中の人達が二組に別れて「綱引」を始める



曉

時分には、もう誰も彼も祭りの氣分に酔つてしまつて、みんな子供のやうになつてはしやぎ廻つた。

その日は村のお客様として、近所の村の人達を招んであつたので、さういふ人達ももうこの時分には、すっかり祭氣分にされてしまつてゐて、綱引が始まると兩方に聲援する聲がわあつとばかり喚くやうに聞こえて、何時までも勝負が附かなかつたから、到頭これは引分ひきわけといふ結果になつてしまつた。そしてその次ぎには、みんな待ち兼ねてゐたところの「カチユーシヤダンス」が始まつたのだつた。

これは「カチユーシヤダンス」と云ふ名は附けてあるが、盆踊りのやうなもので、唄の文句だけは今度能島が新たに作つたものをうたつた。そしてこの村の女達はみんな露西亞の田舎娘のやうな身装をして、單調な手振りを繰り返しながら踊つた。お鳥もお梅も無論この女達の中に交つてゐた。

大川はその日もやつぱり鐘を鳴らす役目を勤めてゐたが、もうすっかり諦めてはゐるも

の、みんな面白さうに騒いでゐるのを見ると、自分が一緒になつて競技に加はることも出来なければ、餘興の仲間に入ることも出来ない不具な體であるといふことが、今更のやうに寂しく感じられた。

で、大川は一人寂しく、ぢりぢりと照り付ける眞夏の強い日射ひざしを避けて、鐘を吊るした槽せうの傍の大きな梧桐の樹蔭に憩やすんでゐた。みんなはカチユーシヤダンスの始まつてゐる、向ふの廣場の方に往つてしまつてゐるので、そこらには誰の人影も見られなかつた。が、向ふの方からは樂隊の音や唄の歌ひ聲や大勢の人の拍手の響ひびなぞが、燃えるやうに暑い空気を顫ふるはせて聴こえて來た……

「お鳥も面白く踊つてゐるんだ。それだのおれは何故かう寂しいんだらう。」

大川はそんなことを自分で自分の胸に訊いたり何かしてゐるが、そのうち不圖樂隊の音がぱつたり止んで、喝采の聲や拍手の響が嵐のやうに見物の人達の中から起つた。

「ああ、やつと濟んだ、濟んだ。ええと……今度は何だつけ……さうだ、希望行列か……」



まあ、兎に角鐘を鳴らす時には、誰か知らせに來て呉れるだらう。

彼はそんなことを胸のうちで考へながら、別に立ち上がらうともせず、だんだん傾いてゆく日脚を眺めてゐた。と、丁度静岡市の方から小乗合馬車が一臺、遠くの方からこっちの方へ砂煙を立てながら近付いて來るのが見えたが、そのうちこの村の入口のところに来ると、車を駐て二人の客を下ろして、そのまま喇叭の音を高く野面に響かせながら、林の蔭に見えなくなつてしまつた。

「誰だらう、あれは……。」

大川はさう云つてぢつとそつちの方を眺めてゐたが、そのうちその人影がだんだんこつちに近付いて來るのを見ると、如何やら女の方は彼の妹の優梨子らしく思はれて來た。そしてよく見るともう一人の男は老人である上に目が盲ひてゐると見えて、女に手を取られながら危い足取で、田圃道をとほとほ辿つて來るのだつた。

「優梨子のやつ……よくのめのめとこの村にやつて來やがつたな。しかしそれにしてもあ

の伴れの男は誰なんだらう。」

二人の姿は暫くの間木立の蔭に隠れてしまつたので、そんなことを考へながら、再び姿を現はすのを待つてゐるが、そのうち今度はもう大分間近のところにはひよつこり出て來たのを何の氣なしに見ると、その目の盲へた老人らしい男といふのは、疑ひもないあの東海林なのだつた。

大川は思はず愕きの聲を上げさうになつたが、その時丁度誰か彼の背後から、

「おい、君……。鐘だ、鐘だ……。」

と叫ぶ聲が聞こえたので、急いで立ち上がつて、鐘から吊り下げられた綱を力強く引いた。

それはダンスが終つて、これから直ぐに「希望行列」が始まるといふことを、みんなに知らせる鐘なのだつた。



向の廣場には、もう最後の餘興であるところの「希望行列」が始つてゐた。

思ひ思ひに假装をした男女が、ぞろぞろ樂隊の奏する行進曲につれて歩き廻る……。唯それだけのものだつたけれども、西郷隆盛、ヨカナアン、達摩、ピエロオ、武士、巡禮などと云つたものの中に、體中眞黒に墨で塗つて印度人に扮したり、それから體中赤く塗つて、頭や手足にも赤い布を巻きつけて火に扮したりした、全く奇想天外と云つてもいいやうな思ひもつかない假装をするものがあつて、喝采の聲や拍手の音が、時々どつと崩れるやうな笑ひ聲と一緒に聴こえて來た。

が、丁度その時こつちではそんな笑ひ聲などは耳にも入れずに、大川が頑固に妹がこの村に入るのを拒んでゐるところだつた。

「さあ、歸れと云つたら何故歸らないんだ。ここはお前達のやうな心の汚れたやつの來る

ところではないのだ。」

「しかし、兄さん……。あたしも東海林も今ぢやあもうすつかり悔いてゐるのです。それでもう財産も何も棄ててしまつて、かうして遙々やつて來たのぢやありませんか。兎に角ちよつとで好うございますから、どうぞ是非能島さんに會はせて下さい。」

「何だ……。そんなことを云つて、お前はまた能島先生を誘惑に來たんだらう。」

「いいえ、そんなつもりでやつて來たんぢやありません。ほんとにあたしは新しい清い生活に入りたくてやつて來たのです。」

さういふ優梨子の顔には、憐憫を乞ふやうな悲しみの色がありありと現はれてゐた。が、そんなものは今の大川の目には映らなかつた。

「いいや、嘘だ。おれにはお前がここにやつて來た譯はちやんと分つてゐるんだ。さあ、もうつまらないことを云つてゐるずにさつさと歸れ。」

「いいえ、歸りません。能島さんにお目にかかつて、あたしは如何してもこの村の人にし



て貰ふのです。」

「何だ。如何してもお前は歸らないのか。」

「ええ、歸りませんわ。」

「よをし……。それぢやあおれが村境のところまで連れて往つてやる……。」

大川がさう云つて優梨子の手を取らうとする時、それまで黙つて俯向いたまま、殆んど身動きもせずに二人の話を聽いてゐた東海林が、始めて打沈んだ聲音で聲を懸けた。

「まあ、お待ちなさい。わしは東海林といふんですが、如何もあなたの聲には覺えがある。あなたとは何處かでお目にかつたことがありますよ。」

「ええ、あります。お鳥の見舞に往つた時に、あの病院であなたに會つたことがあります。」

さう云ひながらも大川は、變り果てた東海林の姿を、ちつと見守らすにはゐられなかつた。半面焼け爛れた醜怪なその顔、ひたと旨ひてしまつてゐる氣味の悪いその目、悄然と

立ち竦んだやうにゐる見すほらしいその姿——何處にあの倨傲だつた黄金魔の姿が残つてゐるだらう。ちつと見守つてゐるうちに彼は何だかこの東海林といふ男が憐れになつた……。

と、東海林は暫くすると諦めたやうに優梨子の方を向いて、

「如何だ、優梨子。もう諦めて歸らうぢやないか。折角わし達はかうして遙々訪ねて來たのに、入れて呉れんとなれば仕方がない。さあ、往かう。」

と云つて歸りかけやうとしたが、遽か盲目の悲しさには、直ぐに木の根に躓いて轉びさうになつた。

「ああ、危い……。」

大川は思はずさう云つて、己れも不自由な體ながら駈け寄るやうにして體を支へたが、その時不圖握り合つた手は、如何してだか何時までも離す氣になれなかつた。大川の胸は何にも云へない温かい心持で一杯になつた。と、同時に思ひも懸けない涙が頬に流れて、



涙含んだやうな顫へを帯びた聲が、<sup>ほほし</sup>迷るやうに彼の口を洩れた。

「いけない、いけない、歸つちやいけない。歸れなんて云つたのは、あたしが悪かつたのです。ここに來てはもう敵も味方もないといふことを、あたしがすっかり忘れてゐたからなのです。どうぞここにゐて下さい。あたし達の兄弟になつて働いて下さい。」

彼はさういつてから優梨子の方を向いて、

「おい、優梨子。お前もどうぞここにゐてくれ。兎に角今直ぐ先生に會はせるから……。」

と、云つたかと思ふと、松葉杖に縋りながら、賑やかな、廣場の方へ急いで往つた。そして間もなく彼が連れて來たのは、トルストイに假装をした能島だつた。

それは全く假装とは思はれない位、あの寫真にある老いてからの杜翁の姿にそっくりだつた。

## 四

「希望の村」には唯愛があるばかりだつた。地にも愛が満ちてゐれば、人の心にも愛が溢れてゐた。そこには資本家もなければ労働者もなかつた。貴族もなければ平民もなかつた。富豪もなければ貧民もなかつた。強者もなければ弱者もなかつた。誰も彼もが唯一人の人間としてともに働きともに生きた。

希望に満ちた平和な日が、毎日楽しく續いた。みんな生きてゐることの悦びを感じてゐる人達ばかりだつたから、妬みとか怒りとかいふやうなものは誰の胸にも起らなかつた。従つて醜い争ひもこの村では絶えてなかつた。鐘の音を聽いて目覺め、鐘の音を聽いてそれぞれ定められたところへ急いでゆく……。そしてまた鐘の音を聽いて家に歸り、鐘の音を聽いて靜かに眠りの床に入る……。夜の空では幸福の星がこの村の上のところ、この村の人達を祝福するやうにきらきらと瞬く……。かうして穏やかな日が過ぎると、また平和な日がみんなを待ち受けてゐる……。

能島を始め、北田も、東谷も、平野も、それから不死身の安も、みんな畑や林に出て、



それぞれの仕事に精を出して働き、お鳥も、優梨子もお梅も、毎日楽しく工場へ出懸けて往つたが唯大川と東海林との二人は、ともにまともな體でないところから、さう云つた力業ちからわざをすることが出来なかつた。それで大川はこゝに來ると最初から鐘を鳴らす役目を勤めることになつたのだが、東海林はこれより猶不自由な盲目であるだけに、何にすることも出来なかつた。が、大川は無理に能島に頼んで、やつぱり彼と同じやうに、鐘を鳴らす役目をさせることにして、二人は交る交る鐘を鳴らした。

今はもう二人は敵でも味方でもなかつた。二人は兄弟のやうに愛し合ふ、極めて幸福な村民だつた。夏が過ぎて秋が來ると、田や畑では收穫とりのいれに忙がしかつたが、唯鐘を鳴らすだけの役目を勤めてゐる二人は、單調だけれども、至極呑氣な時を過ごしてゐた。盲目の東海林がほんやり草を敷いて座つてゐるところは、もうまるで以前のやうな姿は見られなくなつて、唯一個の老百姓としか見えなかつた。大川がこの傍で松葉杖をそこに置いて、うつとり空を見上げたり何かしてゐるところは、これはもう職工時代の面影は見られなかつた。

「ねえ、爺さん。(みんな東海林のことをかう云つて呼んだ) 以前のことを考へると夢のやうだね。」

「うん、全く夢のやうだよ。わしは今になつてやつと金なんてものはつまらないものだといふことが分つたよ。」

「ほんとに金なんてつまらないものさ。金があつたつて幸福は買へないからなあ。」

「さうだとも……。それよりもお互ひに愛し合つて生きてゆけば、自然幸福は向ふからやつて來るのだ。」

二人は時々思ひ出したやうにこんな話をし合つてゐるが、そのうち話の種も盡きてしまふと、東海林は黙つて野面のづらを渡る風の音に聞き惚れ、大川は黙つて大空おほぞらを見上げる……。夕方になるとその空を雁が、群がつて啼なきつれてゆく……。

能島は仕事の行き歸りに、不圖この以前敵味方だつた二人が、仲好く楽しさうに話し合つてゐるところを見ると、何となく涙含ましいやうな氣持になつて、思はず立ち留まつて



考へ込むことがある。

「愛だ、愛だ。愛が二人をああして呉れたのだ。東海林を盲目にしたのも、大川を雙脚にしたのも、みんな愛が心あつてしたことなのだ。やつぱりおれの考へてゐたことは好かつたのだ。」

さう思ふと彼の胸は、何とも云へない喜びで一杯になつて、しまひには涙さへ頬を傳つて流れるのだつた。

冬が来て、風が霜を吹いて来るやうになつても、鐘の音は變らなかつた。夜がほのほのと白む頃に、村の人達の安らかに眠りを覺ます曉の鐘は、先づ目覺めた人達の耳に、

「愛せよ、人々。」

と告げるやうに、高く朗かに響き渡るのだつた。

創作 あかつきの鐘 終

昭和五年五月十五日 七版印刷

昭和五年五月二十日 七版發行

あかつきの鐘 奥附

定價 金壹圓八拾錢

著者 吉井勇

發行者 松浦一郎

印刷者 村松治助

版権所有



發行所

大阪市東區博労町貳ノ貳貳  
攝器口座 阪八五二八六番

近代文藝社











